

列王記略下

第一章

オコジア人を遣してベールセブブに問わしむ—エリアその死を預言す—
彼天より火を下して二人の隊長とその隊員とを焼き殺す。

一 さて、アカブの死したる後、モアブ、イスラエルに叛け
り。1) オコジアはサマリアに有てるその高間の格子の間よ
り落ちて2) 病めり。されば使者を遣すとして、之に云いける
は、「行きてアツカロンの神なるベールセブブ3) に、我こ
のわが病より回復するや否やを問え。」と。三時に主の使
テスベ人エリアに告げて云いけるは、「起ちて上り、サマ
リアの王の使者に逢いて、之に云え、
「抑々イスラエルに
天主なければとて、汝等アツカロンの神なるベールセブブ
に問わんとて行くや。四この故に主はかく曰う、
汝、そ

第一章 1) ダヴィドに征服され
たモアブは、王國分裂の時から
も依然十族の王國に貢を納めて
いた。—2) 当時の窓は今のそれ
の如くガラス窓でなく、普通ど
く細い木の簡単な格子で出來て
いた。それで之によりかかると、
兎角過ちが生じやすい。—3) 「蠅
の神」の義。後のユデア人は、
續一二・二四にある如く、惡魔
のかしらをかく稱した。

の上りし床を下ることなくして死に亡すべし。と。」「エリア乃ち
 去りぬ。五かの使者等はオコジアの許に歸れり。彼、之に「汝等何
 故に歸りたるか。」と云いしに、六彼等之に答えけるは、「或人、我
 等に逢いて、我等に云えり、」行きて、汝等を遣したる王の許に歸
 り、之に云うべし、主かくぞ曰う、イスラエルに天主なければと
 て、汝、アツカロンの神なるベールセブブに問わんとて人を遣すや。
 この故に、汝その上りたる床を下ることなくして、死に亡すべし、
 と。」「七王、彼等に云いけるは、「汝等に逢いてこの言を告げた
 るその人は、いかなる形容、いかなる服装なりしや。」八彼等「毛の
 人⁴⁾にして、腰に革帶⁵⁾を締め居たり。」と云いしに、王は「そはテ
 スベ人エリアなり。」と云えり。九茲に於いて王は、五十夫長とその
 部下なる五十人とを、彼の許に遣せり。六彼、エリアの許に上り行
 きたるに、山の頂に坐し居たれば、之に云いけるは、「天主の人よ⁷⁾

⁴⁾ 毛の袍、即ち羊か
 駱駝の毛で製した袍
 或は毛皮を着ている
 人。――⁵⁾ 富者の高價
 な亞麻帶の代りで、
 貧者の服装。――⁶⁾ イ
 スラエル軍は、千夫
 隊、百夫隊、五十夫
 隊に分れていた。た
 だ一人を捕縛するの
 には随分多人数の派
 遣であるが、それは
 エリアの力を恐れた
 からである。――⁷⁾ 皮
 肉な呼びかけ。「か
 く自稱している者よ
 死刑の知らせを聞き
 におりて来よ」

一〇 王、下れと命じ給えり。」と。s) 一〇 エリア答えて五十夫長に云いけるは、「我もし天主の人ならば、火、天より下りて、汝と汝の五十人とを焼き盡せ。」と。忽ち火天より下りて、彼及び彼と共にある五十人を焼き盡しぬ。二されど王は再び彼の許に、他の五十夫長と之に従う五十人とを遣せり。彼エリアに云いけるは、「天主の人よ、王はかく曰う、〃急ぎ下れ。〃と。」二三 エリア答えて、「我もし天主の人ならば、火、天より下りて、汝と汝の五十人とを焼き盡せ。」と云いしに、火、乃ち天より下りて、彼及びその五十人を焼き盡しぬ。9) 一三 王は累ねて第三の五十夫長、及び之と共にある五十人を遣せり。10) 彼到るや、エリアの前に膝を曲げ、之に願いて云いけるは、11) 「天主の人よ、わが生命及び我と共にある汝の僕等の生命を軽んじ給うなかれ。一四 視よ、火、天より下りて、前の二人の五十夫長、及び彼

s) エリアは多分その時カルメル山にいたから。
 9) 天主は重ね重ねの奇蹟で、その時最も重大な危険に瀕した眞の宗教のため熱心に盡している預言者エリアを、明らかに保護し、改めて天主の使者たることを證し給うた。
 10) ひどい不信仰と、頑固な反抗心とで、王は三度目にもまた兵を遣した。
 11) 一つには前二者の如く自分もなることを恐れてであるが、また一つにはこの者には信心があつたらしい。

一五 等と共にありし五十人を焼き盡せり。されど今は、乞う、汝わが生
命を憐み給わんことを。」と。 一五時に主の使、エリアに告げて、

「彼と共に下れ、恐るるなかれ。」と云いければ、彼乃ち起ちて、

一六 之と共に王の許に下り、 一六彼に云いけるは、「主かくぞ曰う、 汝
恰もイスラエルに言を問うべき天主あらざるかの如く、アツカロンの

神ベールセブに問わんとて、使者を遣したれば、是によりて汝

一七 その上りたる床を下ることなくして、死に亡すべし。」と。 一七かく

て彼は、エリアが告げたる主の御言の如くに死せり。次いでその兄

弟ヨラム、ユダの王ヨザファトの子ヨラムの第二年に、¹²⁾ 彼に代り

一八 て王となれり。蓋しオコジアには子なかりしなり。一八さてオコジア

の爲したる残余の事は、是、イスラエルの王の歴代史の書に録され

たるに非ずや。

12) 彼が父ヨザファトと共に政を執つた第二年。即ちヨザファトはその統治の第十六年シリアに出征した時、わが子ヨラムを共同執政者、攝政に任じたが、ついに第二十二年、統治を全くヨラムに譲りその後なお二年生きていた。

第二章

エリア天に揚げられ、エリゼオその後繼者となる――少年等エリゼオを嘲弄して熊に裂かる。

一 一さて、主旋風によりて、エリアを天に擧げんとし給える折しも、偶々
 エリアとエリゼオ、ガルガラより出で行きたり。二 エリア、エリゼオ
 に云いけるは、「主我をベテルまで遣し給えるにより、汝は此處に留ま
 れ。」エリゼオ彼に云いけるは、「主は活き給う、また汝の靈魂は活く。
 我は汝を離れ去らじ。」と。かくて彼等ベテルに下りしに、1) 三 ベテルに
 在る預言者達の子等、エリゼオの許に出で來りて之に云いけるは、「汝
 知るや、今日主が汝の主人を汝より取らんとし給うを。」彼答えけるは、
 「我も亦之を知る、黙せよ。」と。2) 四 時にエリア、エリゼオに云いける
 は、「主我をイエリコに遣し給えるにより、汝は此處に留まれ。」3) 彼云
 いけるは、「主は活き給う、また汝の靈魂は活く。我は汝を離れ去らじ。」

第二章 1) エリ
 アは自分の設け
 た預言者の学校
 をもう一度訪れ
 る。――2) エリゼ
 オはかかる悲し
 い事について語
 り合うことを拒
 否する。――3) 謙
 遜から自分の榮
 えを誰にも見ら
 れまいとして。

五 と。かくて彼等イエリコに至りしに、^五イエリコに在る預言者達の子等、エリゼオに近づきて之に云いけるは、「汝知るや今日主が汝の主人を汝より取らんとし給うを。」⁴⁾ 彼云いけるは、「我も亦之を知る、黙せよ。」と。^六時にエリア、彼に云いけるは、「主我をヨルダンまで遣し給えるにより、汝は此處に留まれ。」^六彼云いけるは、「主は活き給う、また汝の靈魂は活く。我は汝を離れ去らじ。」と。彼等乃ち兩人共に行きしに、^七預言者達の子等五十人、彼等に従い來り、遙かに對いて立てり。また彼等兩人はヨルダンの澗に立ちたり。^八エリア己が袍を取り、之を巻きて水を打つや、^九水二手に分れたり。兩人乃ち乾ける處を通り行きぬ。^九渡り終えし時、エリア、エリゼオに云いけるは、「わが汝より取去らるるに先立ち、汝、我をして汝の爲になさしめんと欲する所を求めよ。」エリゼオ云いけるは、「願わくは、汝の靈を、我には二倍ならしめんことを。」と。^{一〇}彼答えけるは、「汝は難

4) 彼らはエリア自身から聞いて知っていたのである。
 5) 曾て立法者モイゼが杖で紅海の水を分けたように、ここではエリアが預言者の袍でヨルダンの水を分けた。
 6) 最も普通の説によれば、エリアの能力の二倍。他の説によれば彼の長子たる弟子なるが故に、彼の靈の分前を二倍にして。
 エリゼオは暗に申二一・一七のモイ

き事を求めたり。然れどもわが汝より取らるる
 時、汝もし我を見れば、汝の求めたる事かなえら
 るべし。されど見ずば、かなえられざるべし。」
 と。二 彼等歩行を續けて、進みながら語れる
 間に、視よ、火の車と火の馬、兩人を隔て、エ
 リア旋風によりて天に昇りぬ。三 時にエリゼ
 オ、見て、「わが父よ、わが父よ、イストラエル
 の車とその馭者よ。」と叫びしが、その後彼を
 見ることなかりき。やがて彼はその衣服を取り
 之を二つに裂きぬ。四 しかしてエリアの身よ
 り落ちたる袍を拾い上げ、戻りてヨルダン川の
 澗に立ち、五 エリアの身より落ちたる袍を以て
 水を打ちしが、分れざりしかば、六 彼、「エリア

ゼの規定をさしているのであつて、それに
 よれば長子は父の遺産の分前を他の二倍だ
 け貰うことになつてゐる。それで彼は自分
 のために師の靈の分前を、預言者の他の子
 等が受くべき分より多くして貰うよう要求
 しているのである。一七)それは私の勝手に
 ならず、天主の御権限内に属することであ
 る。一八)馬車に乗せるのは、ある所から他
 の所へ運ぶ最も普通な方法である。エリア
 は輝く雲に乗つて塵界を去つた。これを繪
 には馬車として描く。一略前二・五八。集
 四八・一三。一行先はどこか。それについ
 ては聖書に記してないので、何とも斷言で
 きぬ。一九)かゝる師が自分から奪い去られ
 たことを悼む印。一十)ウルガタによれば、
 天主は先ずエリゼオを驗すために、すぐに
 は應え給わなかつた。この奇蹟は他の人々
 の前にエリゼオがエリアの後繼者たること

一五 天主、そも今何處にか在す。」と云いて、また水を打ちしに、此方と彼方とに分れたり、よりてエリゼオ乃ち渡りぬ。一五折しもイエリコに在る預言者達の子等、向いより之を見て、「エリアの靈エリゼオの上に留まれるよ。」と云い、

一六 來りて彼を迎え、地に平伏して之に敬禮し、一六之に云いけるは、「視よ、汝の僕等と共に、剛力の士五十人あり、彼等行きて汝の主人を探ぬるを得べし。然らずば或は主の靈彼を取りて、或山か或谷に投げ落とし給うこともあらんか。」

一七 彼云いけるは、「遣すなかれ。」と。一七されど彼等、彼に強いければ、終に彼承諾いて「遣せ。」と云えり。よりて彼等、その五十人を遣しけるが、彼等三日の間探ねたれども、見當らざりき。一八されば彼等は彼の許に歸り來りぬ。彼は

一八 イエリコに留まり居たるが、彼等に云いけるは、「我汝等に、遣すなかれ。」と云いしに非ずや。」と。一九時に市の人々エリゼオに云いけるは、「視よ、わが卿よ、汝の自ら見給う如く、この市に住むは甚だ良し。されど水悪しくして、

二〇 地不毛なり。」彼云いけるは、「新しき容器を我に持ち來れ、その中には塩¹¹⁾

を證明するため。」「分れざりしかば」という語はへブレオ語の聖書にはない。11) 清いことと腐らぬこととの二重の象徴

を證明するため。」「分れざりしかば」という語はへブレオ語の聖書にはない。11) 清いことと腐らぬこととの二重の象徴

三 を入れよ。」と。彼等の持ち來りし時、
三 彼、水の源に

出で行き、その中に塩を入れて云いけるは、「主かくぞ

曰う、我、是等の水を癒やしたり。今より後、之によ

三 死も不毛もあらざるべし。」と。
三 かくてその水癒

やされて今日に至れり、エリゼオの語れる言の如し。

三 三 さて、彼は其處よりベテルに上りしが、
12) 道を上りお

る時、小童等市より出で來りて、彼を嘲弄し、「上れ、

二 四 禿頭。上れ、禿頭。」と云えり。
三 四 彼、振向きて彼等を

見、主の御名によりて之を誣うや、二頭の熊、森より出

で來りて、彼等の中四十二人の小童を裂きたり。
14) 三 五 彼

また其處よりカルメルの山に行き、彼處よりサマリアに

歸りぬ。

12) ベテルには、主要な犢禮拜所があつたが、また預言者の学校もあつた。子供等の嘲弄はベテルの人々の心が一般にどれほど悪かつたかを示している。—13) 侮辱の語。禿頭は、恥すべきこと(賽三・一七)とされていた上に、多分癩病の疑いあり(利一三・四〇以下)、人々に嫌われたためもあつたらしい。—14) 自分の子等に眞の宗教とその役者(えきしや)とに對する偏見を吹きこんだ、ベテルの住民等は、かくの如く天主の罰し給う所となつた。

第三章

イスラエル、ユダ、及びエドムの王等、モアブの王と戦う。

一 さて、アカブの子ヨラムは、ユダの王ヨザファトの第十八年に、サマリアに於いてイスラエルの王となり、十二年の間治めたり。二 彼、主の御前に悪を行いが、その父母の如くにはあらで、その父が造りたるパールの像を取除きたり。三 然れども彼は、ナバトの子にしてイスラエルに罪を犯さしめたるイエロボアムの罪を固執して、之より離れざりき。四 茲に、モアブの王メサ¹⁾は、數多の羊を飼いて、イスラエルの王に、羔十萬頭牡羊十萬頭をその毛と共に納め居たるが、²⁾五 アカブの死するに及び、彼はイスラエルの王と結びたる契約を破れり。六 よりてヨラム王は、その頃サマリアを出でて、すべてのイスラエルを調査べ、七 またユダの王ヨザファトの許に人を遣して、¹⁾モアブ

第三章 1)メサは、一八六八年に発見された、メサのイスラエル人に對する戦勝と、モアブの爲の功勞とを謳歌する、いわゆるメサの記念碑で知られている。メサの記念碑には、今日まで傳つていゝる中でも最古の、ヘブレオ語碑文が刻まれているが、これは今パリーのル¹⁾ヴル博物館にある。
2) 契約の貢物として。

の王、我に背きたり。我と共に來りて彼と戦え。」と云わしめたるに、彼答えけるは、「我、上り行かん。わが者は汝の者、わが民は汝の民、わが馬は汝の馬なり。」と。ハヨラムまた云いけるは、「我等いずれの道より上るべきか。」ヨザファト答えけるは、「イドウメアの荒野より。」と。九かくてイスラエルの王とユダの王とエドムの王、行きて七日かかる路をとりて迂回したるに、軍勢と之に従う家畜との飲水なきに至れり。3) 一〇イスラエルの王云いけるは、「ああ、ああ、ああ、主が我等三人の王を集め給えるは、我等をモアブの手に付さん爲なり。」と。一一ヨザファト云いけるは、「主の預言者此處に在らずや、あらば我等之によりて主に願わん。」と。イスラエルの王の僕の一人答えけるは、「サファトの子にして、エリアの手の上に水を注ぎたる4) エリゼオ此處5) にあり。」と。一二ヨザファト云いけるは、「主の御言、彼の許にあり。」と。イスラエルの王と、ユダの王ヨザファトと、エドムの王、乃ち彼の許に下り行けり。一三然るにエリゼオ、イスラエルの王に云いけるは、「我と汝と何の關係かある。」

3) この道は死海の南端を迂回していた。
 4) エリアの下僕であつた。
 5) 近くに。

一四 汝の父、汝の母の預言者等の許に行き給え。」イスラエルの王云いけるは、
 「何故主はこの三人の王を集めて、之をモアブの手に付さんとし給えるぞ。」
 一四 エリゼオ彼に云いけるは、「我がその御眼前に立つ、萬軍の主は活き給う、
 我、ユダの王ヨザファトの面目を辱しむるにあらずば、汝に聽かず、汝を顧
 みざらんものを。一五 されど今琴彈手を我に連れ來れ。」と。かくて琴彈手が
 一六 奏づる間に、主の御手彼に臨みたれば、彼云いけるは、一六 主かくぞ曰う、
 一七 「この谷川の底に、溝に溝を作れ。」一七 實に主はかくぞ曰う、「汝等、風を
 も雨をも見ざるべし。しかもこの川底は水に満たされて、汝等も汝等の家族
 一八 も汝等の家畜も、飲むことを得ん。一八 されど是は主の御眼に小さき事なり、
 一九 主はその上モアブをも汝等の手に付し給わん。一九 されば汝等、すべて塞ある
 市と、すべての選抜の邑とを撃ち滅ぼし、果を結ぶあらゆる樹を切り倒し、
 すべての水の源を悉く塞ぎ、すべての優れて良き畑を石もて覆うに至るべ
 二〇 し。」と。二〇 かくて翌朝の慣に犠牲を献ぐる時のことなりき、視よ、水

(1) 多分詩
 篇を歌つ
 たり祈つ
 たりしな
 がら。
 (2) 朝の犠
 祭は曉に
 聖殿で献
 げた(利
 六・九以
 下)。水
 は山々に
 降つた豪
 雨から來
 たのであ
 る。

二一 エドムの道より來りて、地は水にて満たされたり。二三さて、モアブ人は皆、王
 等の彼等と戦わんとて上り來れる由を聞き、身に劍を佩びたる者悉く集まり
 二二 て、國境に立てり。二三彼等朝早く起き出でしが、即にして日昇りて水を照らす
 二三 や、モアブ人は、彼等の正面なる水の、赤くして血の如きを見たり。二三彼等云
 二四 いけるは、「劍の血なり。王等同志討ちして、互に殺し合えるなり。モアブよ、
 二四 いざ、分捕に行け。」と。二四彼等乃ちイスラエルの陣營に入り行きしが、イス
 二五 ラエル起ちてモアブを撃ち破りたれば、彼等その前より逃げ去りぬ。勝てる者
 かくの如く進み行きてモアブを討ち、二五市々を破壊し、すべての良き畑には各
 人石を投げ、水の源を悉く塞ぎ、果を結ぶあらゆる樹を切り倒したれば、た
 だ煉瓦の塼のみ残り。s) しかし市は投石器もつ兵に圍まれ、その大部分は毀
 二六 たれたり。二六モアブの王は之、即ち敵の勢優れるを見るや、劍を抜く者七百
 二七 人を自ら率いて、エドムの王の許に突入せんとしたれど、能わざりき。二七茲に
 於いて彼は、己に代りて王となるべきその長子を取り、之を燔祭として塼の上

s) 戦争
 しても
 負けた
 者がす
 べて生
 活出來
 なくな
 るよう
 なこと
 をする
 のは、
 申二〇
 ・一九
 で禁じ
 られて
 いた。

に献げたるに、⁹⁾ イスラエルの中に大いなる憤慨生じ、彼等直に彼を離れて己が國に歸りぬ。¹⁰⁾

9) 攻圍者達を見て、町を救うために、いかなることをされても退かぬということを示し、彼らを威すつもりで。——10) 歴二・一。

第四章

エリゼオ死せる子を蘇らしむるなど奇蹟を行う。

一 茲に、預言者達の妻の一人なる女、エリゼオに叫びて云いけるは、「汝の僕なるわが夫死せり。汝の知る如く、汝の僕は天主を畏れたる者なりき。然るに視よ、債權者來りて、わが二人の子を奪い、その僕となさんとす。」

二 といひ、エリゼオ之に云いけるは、「汝我をして汝の爲に、何をなさしめんと欲するか。汝己が家に何を有するか、我に告げよ。」

女答

第四章 1) 債權者は支拂不能の債務者を賣るか

もしくはは奴隸として、七年間奉公させる権利があつたが、その後また自由にしてやらねばならなかつた。利二五・一四参照。

三 四 五 六 七 八 九 一〇

えけるは、「汝の婢なる我は、わが家に少量の塗油²⁾の外何をもち有せず。」^三彼云いけるは、「行きて、汝の隣人一同より、空虚の容器を少からず借りよ。

四 次いで、入りて汝の子等と共に、汝内部に居りながら、汝の戸を閉ざし、³⁾

そのすべての容器にそれを分ち入れ、満ちたらば之を取除けよ。」と。女乃

ち行きて、己と己が子等との背後に戸を閉ざし、彼等が容器を持ち来るや、女

注ぎ入れたり。六 容器満つるに及びて、女その一人の子に「なお一つの容器を我

に持ち來れ。」と云いしが、彼「最早あらず。」と答へたるに、その油最早出で

來らざりき。七 やがて女來りて、天主の人に告げたるに、彼云いけるは、「行きて

て油を賣り、汝の債權者に支拂え、しかして汝と汝の子等とは、その殘餘にて

暮せ。」と。八 さて或日のこと、エリゼオ、スナムを通り過ぎしが、其處に一人

の名ある女あり、彼を引き留めて物を食せしめれば、彼は屢々其處を通る度

に、その許に立ち寄りて物を食せり。九 女、その夫に云いけるは、「我見るに、

屢々我等の許を通り過ぐるかの人、天主の聖人なり。一〇 されば我等、彼の爲

に、その許に立ち寄りて物を食せり。九 女、その夫に云いけるは、「我見るに、

2) 身に油を塗つて芳香を放つようにする

3) 誰にも邪魔をされぬように。

は、得三・三

参照。

3) 誰にも邪魔をされぬように。

に小(こ)さき高(たか)間(ま)を作(つく)り、彼(かれ)の爲(ため)に臥(ふ)床(と)と、卓(つく)と、腰(こし)掛(かけ)と、燭(しょく)台(たい)とをその中(なか)に置(お)かん、これ、彼(かれ)が我(われ)等(ら)の許(もと)に來(きた)る時(とき)其(そこ)處(こ)に泊(と)まるを得(え)んためなり。」と。

二 かくて或(ある)日(ひ)の事(こと)、彼(かれ)來(きた)りて高(たか)間(ま)に立(た)ち寄(よ)り、其(そこ)處(こ)に休(やす)めり。三 時(とき)に彼(かれ)、

その僕(しもべ)ギエジに、「か(か)の斯(す)ナム(な)の女(おんな)を呼(よ)べ。」と云(い)しかば、彼(かれ)之(これ)を呼(よ)び來(きた)

りしに、か(か)の女(おんな)彼(かれ)の前(まえ)に⁴⁾立(た)てり。一三 彼(かれ)、その僕(しもべ)に云(い)けるは、「か(か)の女(おんな)

に云(い)え、〃視(み)よ、汝(なんじ)萬(ばん)事(じ)に於(お)いて熱(おつ)心(しん)に、我(われ)等(ら)に仕(つか)えたり。汝(なんじ)我(われ)をして、

汝(なんじ)の爲(ため)に何(なに)をな(な)さしめんと欲(ほつ)するか。汝(なんじ)何(なに)か用(よう)事(じ)ありて、我(われ)をして王(おう)、或(ある)い

は軍(ぐん)將(しょう)に告(つ)げしめんと欲(ほつ)するか。〃と。一四 女(おんな)答(こた)えけるは、「我(われ)はわが民(たみ)の中(なか)

に住(す)むなり。」⁵⁾ 一四 彼(かれ)云(い)けるは、「然(しか)らばか(か)の女(おんな)は我(われ)をしてその爲(ため)に、何(なに)

をな(な)さしめんと欲(ほつ)するか。」ギエジ云(い)けるは、「問(と)うな(な)かれ、實(げ)にか(か)の女(おんな)

には子(こ)なく、その夫(おつと)は老(お)いたり。」と。一五 茲(こゝ)に於(お)いて彼(かれ)命(めい)じてか(か)の女(おんな)を呼(よ)

ばしめ、女(おんな)の呼(よ)ばれて戸(と)の前(まえ)に立(た)ちし時(とき)、一六 之(これ)に云(い)けるは、「この時(とき)、

この時(とき)刻(こく)に、汝(なんじ)もし生(いの)命(ち)あらば、汝(なんじ)の胎(たい)に一(いっ)子(し)あらん。」されど女(おんな)答(こた)えけ

4) ギエジの前
に。 5) この
スナム女の言
葉の意味は
「王様やお役
人さまの前に
持出すべき大
したお願いな
ど私にはあり
ません。普通
の用件に對し
ては私の血族
の者が、必要
とあれば、心
配りてくれま
す。」

一七 するは、「否、わが卿、天主の人よ、請う、汝の婢を欺き給うなかれ。」
 と。一七 然るに女懐胎し、エリゼオの云いしその時、その時刻に至り
 一八 て、一子を生みぬ。一八 その子成長し、或日收穫人等の所に出で行き
 一九 その父の許に至りて、一九 その父に、「わが頭痛む、わが頭痛む。」
 と云いしかば、父はその僕に、「彼を取りてその母の許に連れ行け。」
 二〇 と云えり。二〇 よりて僕、彼を取り、その母の許に連れ行きたるに、
 二一 女之を己が膝の上に載せて正午に及びしが、彼遂に死せり。6) 三 茲
 に於いて女上り行き、之を天主の人の臥床の上に置きて戸を閉じ、
 二三 出でて、二三 その夫を呼びて、云いけるは、「請う、汝の僕の一人と
 驢馬とを、我と共に遣せ、さらば我、天主の人の許に馳せ行きて歸
 三三 らん。」と。7) 三三 彼、かの女に云いけるは、「汝何故に彼の許に行く
 や。今日は朔日にも安息日にも非ざるを。」と。女は、「我、行か
 三四 ん。」と答えたり。二四 しかして驢馬に鞍置き、僕に命じて曰く、「驅

6) 少年は日射病で死んだのらしい。
 7) この女はエリアがサレフタの寡婦の子を蘇生させたことを聞いていたので、エリゼオにもそうして貰えろと期待したのである。8) 新月の祭日、及び安息日には、北の王国の信心深いイスラエル人は、いつも預言者たちの所を訪れ、エルサレムにある聖殿参詣の代りとしていたのらしい。

二五 けて急げ、わが爲に道にて暇どることなく、わが汝に命ずる所を爲せ。」と。二五 かくの如くにして、女出發ちて、カルメル山にある天主の人の許に至りけるが、天主の人、此方より之を見て、その僕ギエジに云いけるは、「視よ、かのスナムの女を。二六 故に汝かの女を迎えに行きて之に云え、〃汝も、汝の夫も、汝の子も無事なりや。〃と。」女は「無事なり。」と答えたり。二七 しかして山に來り、天主の人の許に至りてその足を抱きたるに、ギエジ之を引離さんとて近づきけるを、天主の人云いけるは、「之を措け、蓋し、その心苦惱の中にあるなり、されど主は之を我に隠して、我に告げ給わざりき。」と。二八 女、彼に云いけるは、「我、わが卿に子を求めしか。我汝に、〃我を欺き給うなかれ。〃と云わざりしか。」¹⁰⁾ 二九 時に彼、ギエジに云いけるは、「汝の腰に帶し、汝の手にわが杖を取りて行け。人汝に逢うことありとも之に挨拶するなかれ。また誰か汝に挨拶することありとも、之に應う

9) ヘブレオ語サローム、「平安」の義。悲歎の母は、ギエジと共にでなく、自分獨りで、預言者にこの重大な事件の相談がしたかつたのである
 10) 女は子供を求めたのではなく、エリゼオがそらいうことを約束したので、たゞその約束が果たされるよう頼んだだけである（一六節）。

三〇 するなかれ。しかしてわが杖をその子の顔の上に置け。」と。11) 三〇その子の母は
 「主は活き給う、また汝の靈魂は活く。我は汝を離れ去らじ。」と云えり。
 三一 茲に於いて、彼起ちて女に従い行きぬ。三二 さて、ギエジは彼等より前に行き
 て、かの子の顔の上に杖を置きたれど、聲もなく意識もなかりしかば、彼を
 三三 迎えに立戻り、之に告げて、「子起きず」と云えり。三三 エリゼオ乃ち家に入
 三三 りたるに、視よ、子は死して、その床に臥したり。三三 彼入るや、己と子との
 三四 背後に戸を閉ざして、主に祈れり。三四 次いで、上りて子の上に臥し、その口
 三五 に己が口を、その眼に己が眼を、その手に己が手をあてて、之が上に身を屈
 三五 め居たりしに、子の肉體温まるに至りぬ。12) 三五 それより彼戻り來りて、一度
 その家の中を此方彼方と歩み、また上り行きて子の上に臥したるに、子七度
 三六 欠伸して、その眼を開きぬ。三六 茲に於いて彼ギエジを呼び、之に「かのスナ
 三六 ムの女を呼べ。」と云いしかば、彼女呼ばれて彼の許に入りたるに、彼「汝
 三七 の子を取れ」と云えり。三七 女は來りてその足下に伏し、地上にて敬禮し、そ

11) ギエジ

は埋葬を

妨げるよ

う云い付

けられた

12) エリア

の奇蹟に

似ている

一王上一

七二二一。

徒二〇・

一〇。

三八 の子を取りて出で行きたり。三九 かくてエリゼオはガルガラに歸りぬ。折しもその地に饑饉あり、預言者達の子等、彼の許に住めり。13) 彼その僕の一人に云いけるは、「大いなる釜をかけて、預言者達の子等の爲に吸物を調理えよ。」と。

三九 よりて一人野菜を取らんとて、畑に出でしが、野葡萄の如きものを見つけてそれより野瓜を摘み取り、己が袍に満たし、歸りて吸物の釜に刻み入れたり。

四〇 蓋し彼はその何たるかを知らざりしなり。14) 四〇 やがて人々は、その仲間、食せしめんとて盛り分けたるに、彼等その煮物を味うに及び、叫びて「天主の人よ、釜の中に死あり。」と云い、食すること能わざりき。四一 時に彼、「麥粉を持

ち來れ。」と云い、彼等の取り來るや釜の中に入れて、「人々に盛り與えて食せしめよ。」と云いしが、釜の中には最早苦き物あらざりき。四二 然るに或人パー

ルサリサより來りて、初穂のパンと、大麥のパン二十、及びその袋に入れたる新穀を、天主の人に齎しければ、彼、「人々に與えて食せしめよ。」と云えり。

四三 その僕、「是は幾許ぞ、我豈百人に供するを得んや。」と、彼に答えしに、彼

13) 彼と共同生活をした。

14) 橙に似た實を結ぶ

瓜の一種、味甚だ苦く、嘔氣及び腹痛を起す。

四四
再び云いけるは、「人々に與えて食せしめよ、それ主はかく曰う、
彼等食してなお剩餘あるべし。」と。四四 かくて彼之を彼等の前
に供したれば、彼等食しけるに、主の御言の如く、剩餘ありたり。15)

第五章

シリア人ナーマン癩病を癒さるーギエジ、ナーマンの贈物を取りて癩病に罹る。

一 シリア王の軍將ナーマンは、その主君の許に於いて大いなる者に
して、尊敬せられたりき。蓋し、主は彼によりて救拯をシリアに與
え給いしなり。1) 彼は剛毅富裕の人なりしが、癩病なりき。ニさて
會てシリアより掠奪の人々の出で行きて、イスラエルの國より一人
の少女を捕虜として引き來りしが、この者はナーマンの妻に仕えた
り。三 彼女その女主人に云いけるは、「わが主の君、サマリアなる預
言者の許に在し給わば、善かりしならんに。彼必ずやその患い給う
癩病を癒したらんものを。」と。四 ナーマン乃ちその主君の許に入り

15) この奇蹟は、キリストが荒野で群衆に食せしめ給うた奇蹟の前表。

第五章 1) 天主は異教國シリアを救うために、ナーマンを用い給うた。それは天主が世界で唯一の眞の神であつて世界の一切を支配し給うから。一2) シリア、イスラエル兩國の境界辺に常に出沒してい

五 之に告げて、「イスラエルの國の少女然々語れり。」と云えり。五シリア王、彼に「行け、我イスラエルの王に書を送らん。」と云いしかば、彼出で發ちて、銀十タレント、金六千枚、及び着換の衣服十襲を携え行き、六イスラエル王に書を齎せり、その述ぶる所次の如し、「汝この書を受取り給わば、わが汝の許にわが僕ナーマンを遣したるは、汝をして彼の癩病を癒さしめん爲なるを知り給え。」と。七セイスラエル王、書を読むや、己が衣服を裂きて云いけるは、「我豈殺しました活かすを得る天主ならんや、然るにこの人は、我をして人の癩病を癒さんとて、之をわが許に遣したり。注意して視よ、彼は我に敵對う機會を求むるなり。」と。八天主の人エリゼオ、この事、即ちイスラエル王の己が衣服を裂きたる事を聞くや、その許に人を遣して云わしめけるは、「何故汝己が衣服を裂き給いしぞ。彼をしてわが許に來らしめ、イスラエルに預言者ある事を知らしめ給え。」と。九茲に於いてナーマン馬と車とを從え、來りてエリゼオの家の門口に立ちたるに、一〇エリゼオその許に使者を遣して云わしめけるは、「行

たゲリ
ラ隊の
類。
s)アラ
メアの
王は、
イスラ
エルの
王が預
言者を
左右す
る權力
を有す
ると思
つてい
る。

きてヨルダンに入りて七度洗え、さらばまた汝の肉体は健かに、汝
 は潔くなるべし。」と。二 ナーマン怒りて立ち去り云いけらく、「我
 は彼がわが許に出で來り、立ちて主その天主の名を呼び、その手を
 癩病の患部に觸れて、我を癒すならんと思いたり。三 我が入りて身
 を淨めんとするには、ダマスコの河流なるアバナやファルフアルこ
 そ、⁴⁾ イスラエルのすべての水にも優るに非ずや。」と。かくて彼方
 向を轉えて怒りつつ去りたる折しも、三 其の僕等、彼に近づきて、
 之に云いけるは、「父よ、預言者汝に大なる事を命じたりとも、汝
 必ず爲さざるを得ざりしならん。まして今は彼が汝に、「洗え、さ
 らば汝潔くなるべし。」と云いたるものを。」と。一四 茲に於いて彼
 下り行きて、天主の人の言の如く、ヨルダンに入りて七度⁵⁾ 洗いけ
 るに、⁶⁾ 其の肉回復して小童の肉の如くなり、淨くなれり。⁷⁾
 一五 よりて彼、其の從者一同と共に、天主の人の許に歸り來り、其の

⁴⁾ アバナまたはアマ
 ナとも稱するのは、
 ダマスコを貫流して
 いるバラダ河のこと
 ファルフアルは今の
 ナール・エラワジ河
 で、ダマスコの南を
 流れている。兩河と
 も小アジアでは割に
 水量豊かで、且甚だ
 清冽である。一⁵⁾ま
 たしても聖数七であ
 るのを見よ。一⁶⁾沐
 浴には、約九・七、
 一一と同様な象徴的
 意義がある。一⁷⁾路
 四・二七。

一六 前に立ちて云いけるは、「實に我は知る、たゞイスラエルを除きては、いずれの地にも他に天主なきを。されば願わくは、汝の僕より祝福⁸⁾を受け給え。」^{一六} エリゼオ之に答えけるは、

一七 「我がその御前に立つ、主は活き給う、我は受けじ。」と。しかして頻りに強いたれども、飽くまで肯ぜざりき。^{一七} 終にナ

マン云いけるは、「汝の欲する如くにせん、ただ請う、汝の僕なる我に、この地より騾馬に二駄の土を取ること容し給え。

一八 寔に汝の僕は今より後、主を除く他の神々には、燔祭をも犠牲をも献げじ。¹⁰⁾ 一八されど茲に唯一つ、汝その僕の爲主に願ひ給

うべき事あり。即ちわが主君¹¹⁾ 禮拜せんとレンモン¹²⁾ の神殿に入りて、わが手に凭る時、我レンモンの神殿に於いて、彼がそ

の處にて禮拜するに當り、たとい禮拜することありとも、主、この事に對し汝の僕なる我を容赦し給わんこと、是なり。」と。¹³⁾

8) 謝禮。 — 9) これはマテオ一〇・八で、キリストがお弟子達に望まれた精神。 — 10) 彼は自分を癒し給うた眞の神天主に、祭壇を築いて差上げるつもりで、曾て自分が輕蔑していた河のある國の土を記念に貰おうとする。
 11) 王のこと。 — 12) レンモンはダマスコ最高の神。 ナーマンは眞の神天主を認めている以上、もはやほかの神に禮拜を献げることは許されないと思つた。 — 13) ナーマンは、他の神を本心から禮拜するつもりはない。

一九 エリゼオ彼に「安らかに行け。」と云いしかば¹⁴⁾ 彼その地の優れて良き季節に、エリゼオの許を去れり。二〇 然るに天主の人の僕ギエジ云いけるは、「わが主人はこのシリア人ナーマンに遠慮して、その持參せる物を彼より受けざりき。主は活き給う、我彼の後を追い、馳せ行きて、何か彼より物を受けん。」と。二一 かくてギエジ、ナーマンの背後より追いきしに、彼、その己が後より馳せ來るを見るや、その車より跳び下り、之を迎えて、「皆無事なりや。」と云えり。二三 ギエジ云いけるは、「無事なり。わが主人、我を汝の許に遣して云えり、唯今エフライムの山より、預言者達の子等の中なる若者二人、わが許に來りたれば、彼等に銀一タレントと、着換の衣服二襲を與え給え。」と。二三 ナーマン「汝ニタレントを取るこそよけれ。」と云いて、彼に強い、銀ニタレントを二つの袋に入れて縛り、衣服二襲と共に、己が僕の二人に負わせたれば、彼等、彼の前に立ちて運び行けり。二四 既に日暮に及びて、彼到り着くや、之を彼等の手より取りて家の中に蔵め、その人々を遣り返したれば、彼等去りぬ。

14) 預言者は同意しなかつたが、その赤誠に免じて別にいましめもせず、彼を去らせる。

二五 やがて彼入りてその主人の前に立ちしに、エリゼオ云いけるは、「ギエ
 ジよ、汝何處より來りしぞ。」彼答えける、「汝の僕は何處へも行かざり
 き。」と。二六 されどエリゼオ云いけるは、「かの人がその車より戻り來りて
 汝を迎えたる時、わが心その場にあらざりしか。15) かくて汝は今、橄欖畑、
 二七 葡萄酒、羊牛、僕婢を買わんとて、銀を受け、衣服を受けたり。二七 然り
 ながら、ナーマンの癩病も亦、汝と汝の後胤とに附きて永久に及ばん。」
 と。彼その許より出でたるに、癩、雪の如くなりき。16)

第六章

サマリヤの包圍。

一 或時預言者達の子等¹⁾ エリゼオに云いけるは、「視よ、我等が汝の許に²⁾
 二 住む處は、我等の爲に狭し。3) 二 我等ヨルダンまで行き、各人森より一人
 分の材木を取り、以て我等の爲其處に住むべき處を建てん。」と。彼、「行
 三 け。」と云えり。 三 彼等の一人また「然らば汝も僕等と共に行き給え。」と

16) 私は預言者だから、この事を天主に知らせて頂いた
 16) 皮膚の白色は癩病のしるし。民一二・一〇参照。
 第六章 1) 弟子たち。
 2) 汝の指導の下に。3) ガルガラ。エリ

四

云いしに、彼、^{かれ}「我行かん。」と答^{こた}えたり。四 彼乃ち彼等^{かれら}と共^{とも}に行^ゆきぬ。かくて彼等^{かれら}ヨルダンに至^{いた}るや、木^きを切^きり倒^{たお}せり。

五

然^{しか}るに一人^{ひとり}が材木^きを切^きり倒^{たお}す間に、偶々^{たまくおの}斧^{おの}の鐵部^{あたま}、水中^{すいちゆう}に落^おちしかば、彼叫^{かれさけ}びて云いけるは、「ああ、ああ、ああ、わ

六

が卿^{きみ}よ、是^{これ}はわが借^{かり}り受^うけたるものなるを。」と。六 天主^{てんしゆ}の人^{ひと}「そは何處^{いずこ}より落^おちしか。」と云いければ、その人^{ひと}彼^{かれ}にその

七

處^{ところ}を示^{しめ}せり。茲^{こゝ}に於^おいて彼^{かれ}一つの木^きを切^きりて、之^{これ}を其處^{そこ}に投^なげ入^いれたるに、鐵^{てつ}浮^うかび上^ありぬ。四 彼^{かれ}「取^とれよ。」と云いし

八

かば、その人^{ひと}手^てを伸^のべて之^{これ}を取^とれり。八 時^{とき}にシリアの王^{おう}、イ

九

スラエルと戦^{たたか}いおりしが、その臣僕^{しもべら}等^らと諮^{はか}りて、「我等^{われら}斯^{かく}々^々の處^{ところ}に伏^ふ兵^{へい}を置^おかん。」と云^いえり。九 天主^{てんしゆ}の人^{ひと}乃^{すなわ}ちイスラエル

王^{おう}の許^{もと}に人^{ひと}を遣^{つか}わして云^いわしめけるは、「用心^{こころ}して、かの處^{ところ}を

過^すぐるなかれ、そはシリア人^{びとかしこ}彼處^{へい}に兵^{へい}を伏^ふせおればなり。」

アとエリゼオとの相繼ぐ感
化のおかげで、イスラエル
王國では、また眞の宗教が
盛になりかけた。それで預
言者の諸學校も狹隘を告げ
るに至つたのである。

4) この出來事はふしぎな事
として記載されているので
木片などが浮かぶように、
本當の意味で浮かびあがつ
たのである。これは天主
が地上のいかなる困つた事
にでもお救いになることが
でき、大事においても小事
においても助けて下さるこ
とを示すため。

一〇 と。一〇 茲に於いてイスラエル王、天主の人が己に告げたる處に人を遣して
 二 之に先んじ、其處に於ける難を免れしこと、一度や二度に非ざりき。二シ
 リア王はこの事の爲に驚きて、⁵⁾ その臣僕等と呼ばひ集めて云えり、「我を裏
 切りてイスラエル王に告げたる者の誰なるかを、汝等何故我に告げざる
 三 ぞ。」と。二三 その臣僕等の一人云いけるは、「わが主君王よ、然らず。ただ
 イスラエルに居る預言者エリゼオこそ、汝の密室にて語る言をも悉くイス
 一三 ラエル王に告ぐるなれ。」と。一三 王彼等に云いけるは、「行きて、彼の何處
 におるかを見よ。これ、我が人を遣し、彼を捕えんためなり。」と。彼等
 一四 は彼に告げて、「視よ、彼、ドタンに在り。」と云えり。⁶⁾ 茲に於いて、
 彼、馬と戦車、並に有力なる軍勢を遣しけるが、彼等夜に來りてその市を
 一五 圍みぬ。一五 然るに天主の人の僕、夜明に起き、出でて市の周圍に軍勢及び
 馬や戦車のあるを見、彼に告げて曰く、「ああ、ああ、わが主人の
 一六 君よ、我等如何にかすべき。」と。一六 彼答えけるは、「恐るるなかれ、それ

5) 原文「彼の心騒ぎて」。

6) ドタンはサマリアから北へ、タボル山に向かつてゆくこと四時間ばかりの所にある。その廢墟(今日でもテル・ドタンという)を見れば、その小さからぬ町であつたことが結論される。

一七 我等と共にある者は、彼等と共にある者よりも多勢なるぞ。」と。一七し
 かしてエリゼオ、祈りて、「主よ、彼の眼を開きて、見ることを得し
 め給え。」と云うや、主僕の眼を開き給いしかば、彼見たるに、視よ、
 一八 火の馬と車とエリゼオを繞りて山に充滿てり。一八さる程に、敵勢彼
 の許に下り來りしが、エリゼオ主に祈りて「願わくはこの民を撃ちて
 盲目たらしめ給え。」と云いたれば、主、エリゼオの言の如く、彼等
 一九 を撃ちて、見るを得ざらしめ給えり。一九時にエリゼオ彼等に云いける
 は、「是はその道に非ず、またその市にも非ず。我に跟きて來れ、さ
 二〇 らば我、汝等が求むる人を汝等に示さん。」と。乃ち彼等をサマリア
 に連れ行きたり。二〇かくて彼等サマリアに入りたる時、エリゼオ「主
 よ、この人々の眼を開きて、見ることを得しめ給え。」と云いしに、
 三一 主彼等の眼を開き給いければ、彼等己がサマリアの中に在るを見たり。
 三二 イスラエルの王、彼等を見てエリゼオに云いけるは、「わが父よ」

の火の馬と車とは
 エリゼオが蒙つて
 いる天上の御庇護
 を示す表象。
 s) 本當の意味での
 盲目ではなく、周
 章狼狽、なす所を
 知らぬほど、彼ら
 の心を混亂させる
 こと。一) 預言者
 の弟子たちは、も
 とその上長をこう
 よんだのであるう
 らそれが後に修道院
 の目上の呼び名と
 して、一般に用い
 られるに至つた。

二三 我、彼等を殺すべきか。」^{二三} 彼云いけるは、「殺すべからず。蓋は汝、

討たんとて、彼等を汝の劍や弓もて捕えたるに非ざればなり。寧ろ彼

等の前にパンと水とを供せよ。これ、彼等が飲食して、その主の許に

行かんためなり。」と。^{二三} かくて夥しき食物、彼等に出され、彼等且

食し、且飲みけるが、後王之を去らしめければ、彼等その主の許に行

けり。これよりシリアの掠奪者等は累ねてイスラエルの地に來らざり

き。¹⁰⁾ ^{二四} 然るに、この後、シリアの王ベナダド、その全軍を集めて攻

め上り、サマリアを圍みしことあり、^{二五} サマリアは甚しき飢餓に陥り

ぬ。しかも圍まるること甚だ長かりしかば、終には驢馬の頭一箇を銀

八十枚にて、また鳩の糞¹¹⁾ 一カブ¹²⁾ の四分の一を銀五枚にて賣るに至

れり。^{二六} 或時イスラエルの玉石垣の上を通りたるに、一人の女彼に叫

びて、「わが主君王よ、我を救い給え。」と云えり。^{二七} 彼云いけらく、

「主もし汝を救い給わずば、我如何にしてか汝を救うを得べき。打禾

10) これはすぐ後の記載でわかる如くもう戦争が起らなかつたという意味ではない。

11) 「鳩の糞」という語は、穀物の屑や莢のある實の意に解すべきであるかゝるものは他の時代には人が全く食せず、ただ鳩の餌としてのみ用いたものである。
12) 一カブは六分の一セアーで、約二リットルに當る。

二九 二八

場の物を以てか、搾酒場の物を以てか。」と。王また「汝、何を望むや。」と云いしに、女答えけるは、二八「この女我に曰く、汝の子を與えよ、

我等今日之を食わん、しかして明日はわが子を食わん。」と。二九かくて

我等わが子を煮て之を食いしが、他の日我彼女に「汝の子を與えよ、我

等之を食わん。」と云いたるに、彼女その子を隠したるなり。」と。13)

三〇

王、之を聞くや、その衣服を裂きて石垣の上を通り行きしかば、民皆

三一

彼が肌肉につけて内に着たる苦行衣を見たり。三一王云いけるは、「もし

サファトの子エリゼオの首、今日その身に付きおらば、天主我にかく爲

三二

し、更に累ねてかく爲し給え。」と。14) 三二時にエリゼオはその家に坐し、

長老等も彼と共に坐し居たり。王乃ち豫め人を遣しけるに、その使者

の到るに先立ちて、エリゼオ長老等に云いけるは、「汝等は、この殺人

者の子¹⁵⁾がわが首を斬らんとて人を遣したるを知るや。されば注意せよ

その使者の來らん時、戸を閉して、之に入るを容すなかれ。視よ、之が

13) これは申二八・五三、五七に

豫言されている

偶像禮拜に對する罰としてである。――14) エリゼ

オは町をどこまでも防衛するよ

う忠告し、民が悔悛すれば天主

がお助け下さる旨確約しておいたのである。

王の悔悛はただ表面だけであつた。――15) アカブ

とイエザベルとの子。

三三 後にその主君の足音するなり。」と。三三 彼なお彼等に語り
 おる間に、彼の許に來りし使者¹⁶⁾ 現れて云いけるは、「視
 よ、かくの如き禍、主より來れり。我この上何をか主に期
 待するを得べき。」と。

第七章

エリゼオ食糧の氾濫を預言す—翌日シリア軍俄に逃走してサマリア危機を脱す。

一 エリゼオ云いけるは、「汝等主の御言を聽け、主かくぞ
 曰う、〃明日のこの時刻に、サマリアの門¹⁾に於いて、麥
 粉大榘²⁾に一つ一スタテル、³⁾ 大麥大榘に二つ一スタテル
 にて賣らるべし。」と。三三 時に諸將の一人にて、王がその手
 に凭る者、天主の人に答えて云いけるは、「主たとい天の
 水門を開き給うとも、⁴⁾ いかで汝の云えるが如き事あるべ
 き。」彼云いけるは、「汝、己が眼もて之を見ん、されど之

16) このへブレオ語マラク(使者)は種々の批判によれば、メレク(王)の誤謬であるらうという。實際以下の言はヨラムの云つたものである。

第七章 1) 裁判を行う場所でもあり、市場でもあつた。2) へブレオ語「セアー」、一エフアの三分の一で、約一三・一三リツトル。3) 一セアーが僅か銀一シクルの値段だといふので、相場は大いに下落した。4) 信ぜずして嘲弄的に云う言葉。何となれば、今云われた通りにな

三 食する能わじ。」と。三さて、門の入口の傍に、四人の癩病者ありしが、
 四 彼等互に云いけるは、「我等何ぞ死するまで此處に居らんや。我等市に入
 らんか、食物なきによりて死せん。また此處に留まらんか、同じく死せざ
 るを得じ。されば來れ、我等シリアの陣營に逃げ行かん。彼等もし我等を
 五 容赦せば、我等生きん。されどもし殺さば、我等死せんのみ。」と。五 彼等
 乃ち夕に起ちて、シリアの陣營に至りしが、シリアの陣營の入口に至れる
 六 に、其處には一人の人も見えざりき。六 蓋は、主シリアの陣營に、車馬や
 夥しき軍勢の物音を聞かしめ給いしにより、彼等互に、「視よ、イスラ
 エルの王、我等に對抗わんとてへト人⁵⁾とエジプト人との王等を雇い、彼
 七 等我等を襲い來りしなり。」と云い合ひ、七 乃ち起ちて闇に紛れて逃げ、
 その天幕も、馬も、驢馬も陣中に棄てたるまま、己が生命を全うせんと欲
 八 して逃げ去りたるなり。八さてかの癩病者等は、陣營の入口に至るや、一
 つの天幕に入りて、飲食し、其處より金銀、衣服を取り、出でて隠し、再

るためには、
 天から麥粉と
 大麥とが、大
 雨のよりに降
 りでもしなけ
 ればならぬ。
 その嘲弄の罰
 として、彼は
 その恵を見さ
 せられるが、
 自分では食べ
 られない。
 5) 當時勢力の
 強かつた民族
 6) 王上一〇・
 二九。

九

び戻り來りて他の天幕に至り、其處より同じく奪い取りて隠したり。九時に彼等互に云いけらく、「我等が行いは宜しからず。實に今日は吉報の日なり。我等もし黙して朝まで告げずば、罪に問わるべし。いざ、行きて王の宮廷に告げ

一〇

ん。」と。一〇かくて彼等は市の門に至り、人々に告げて云いぬ、「我等シリアの陣營に行きたるに、彼處には一人の人も見えざりき、ただ馬や驢馬が繋がれ、

二

天幕が立てるのみ。」と。二茲に於いて門衛、行きて王宮の内に告げたり。

二三

三王乃ち夜に起きてその臣僕等に云いけるは、「我汝等にシリア人が我等に爲したる所を告ぐ。彼等は我等の大いなる飢餓に悩むを知る故に、陣營を出で

二三

て畑に潜み、彼等市を出で來らば、我等之を生擒にせん。然らば我等市に入るを得べし。」と云うなり。」と。三然るにその臣下の一人答えけるは、「我等

二四

なお邑に残れる五頭の馬を取り、(其はイスラエルに多くありしすべてのの中に) 人を遣して

探偵らしめん。」と。一四茲に於いて二頭の馬を引き來りしかば、王、「行きて

二頭 だての 馬車二 台。

一五 見よ。」と云いて、シリア人の陣營に人を遣せり。一五 彼等はシリア人の後を追いて、ヨルダンまで行きぬ。然るに視よ、沿道到る所、シリア人が周章狼狽して投げ棄てし衣服や什器に充滿てり。使者等乃ち歸りて王に告げたり。一六よりて民は出でて、シリアの陣營を掠奪せり。かくて麥粉大柁に一つ一スタテル、大麥大柁に二一つ一スタテルにて賣らるるに至りぬ、即ち主の御言の如し。一七時に王は、己がその手に凭るかの軍將を門に立てしが民、門の入口にて之を踏みしかば、⁸⁾ 彼死せり。即ち天主の人が、王の己が許に下りし時に云いたる如し。一八また天主の人が王に語りて、「明日のこの時刻にサマリアの門に於いて、大麥大柁に二一つ一スタテル、麥粉大柁に一つ一スタテルと成らん。」と云いし言の如くになりぬ。一九その時かの軍將天主の人に答えて、「主たとい天の水門を開き給うとも、いかで汝の云えるが如き事あるべき。」と云いしに、彼は「汝、己が眼もて之を見ん。されど之を食する能わじ」と云えり。二〇かく豫言されたるその如く、事彼

8) 急いでまた町に歸つて来た人々が、走つて突き倒し踏んだのである。

の身に起りぬ。即ち民、門にて彼を踏み、死に至らしめたり。

9) 豫言が正確に適中した事は、著者に甚だ重要と見えたので、その出来事をもう一度簡単にまとめて書いた。

第八章

エリゼオが豫言したる七年の饑饉の後、スナムの女帰郷して己が畑とその収益とを取戻す—エリゼオ、シリア王ベナダドの死すること、ハザエルの王となることを豫言す—ヨラム死してその子オコジア後を繼ぐ。

第八章 1) 本四・三五。

一 エリゼオは己がその子を蘇らしめたるかの女に告げて云えり、「汝と汝の家族、起ちて行き、何處にても見當る處に留まれ。蓋は主、饑饉を招き給ひしによりて、それが七年の間地上に来るべければなり。」と。1) 二 よりて、かの女は起ちて、天主の人の言の如くになし、その家族と共に行き、日久しくフィリスト人の地に留まれり。三 かくて七年を過す

や、女おんな、ファイリスト人びとの地ちより歸かえりけるが、己おのが家いえと己おのが畑はたけとの爲ために、王おうに嘆願たんがんせんと
 て出いで行ゆけり。四折おししも王おうは天主てんしゆの人の僕しもべギエジと語かたり居おりしが、云いいけるは、「すべ
 てエリゼオが爲なしし大おほいなる事ことを我われに物語ものがたれ。」と。五彼かれ乃すなわち王おうに、エリゼオが死者ししやを
 蘇よみがえらしめたる次第しだいを物語ものがたりおるその時とき、エリゼオがその子こを蘇よみがえらしめたる女おんな、現あらわれ
 て王おうに叫さけび、己おのが家いえと畑はたけとを求もとめたり。ギエジ云いいけるは、「わが主君王きみおうよ、是これこそそ
 の女おんななれ、是これこそエリゼオの蘇よみがえらしめたるその子こなれ。」と。六茲こゝに於おいて王おうその女おんな
 に問といしかば、女おんな彼かれに語かたりぬ。よりて王おうこれが爲ために宮人みやびとを遣つかわし、云いいけるは、「彼女かのおんなの
 すべての所有物もつものと、彼女かのおんながその地ちを去さりたる日ひより現在げんざいまでのその畑はたけの收益あがりとを、悉ことごとく
 彼女かのおんなに返かえし與あたえよ。」と。七或時あるときエリゼオ、ダマスコに至いたりしに、シリアの王おうベナダド
 病やみ居いたるが、人々ひとびと之これに告つげて、「天主てんしゆの人ひと此處こゝに來きたれり。」と云いえり。八王おうハザエル
 に云いいけるは、「汝なんじ、禮物れいぶつを携たずさえ、行ゆきて天主てんしゆの人ひとを迎むかえ、彼かれにより主しゆに問うかいて云いえ、
 我われこのわが病やまいより癒いゆべきか。」と。九ハザエル乃すなわち禮物れいぶつとして、ダマスコの佳よき
 物種ものくさぐさ々らを駱駝らくだ四十頭とつうに負おわせ携たずさえ、行ゆきて彼かれを迎むかえ、その前まえに立たちて云いいけるは、「汝なんじ

一〇の子²⁾ シリア王ベナダド、我を汝の許に遣したり、曰く、
 「我このわが病より癒ゆべきか。」と。一〇エリゼオ彼に云い
 けるは、「行きて彼に告げよ、³⁾ 汝癒ゆべし。」と。されど
 主は彼の必ず死すべきことを我に示し給えり。」と。³⁾ 二し
 かけて彼ハザエルと共に立ち、顔の紅潮するまで憂え居りし
 が、⁴⁾ 終に天主の人泣き出せり。二三ハザエル之に「わが卿何
 ぞ泣き給うや。」と云いしに、彼云いけるは、「我汝がイスラ
 エルの裔等に悪を爲さんとするを知ればなり。汝は彼等の塞
 ある市々を火もて焼き、その若人等を劍もて殺し、その童等
 を壓し潰し、その妊婦を裂かん。」と。⁵⁾ 二三ハザエル云いけ
 るは、「犬にも等しき汝の僕我、そも何者なれば、かかる大
 事を爲さんや。」⁶⁾ エリゼオ云いけるは、「主我に示し給えり、
 汝シリアの王となるべし。」と。一四彼、エリゼオの許を去り

2) 預言者は「父」と稱ばれて
 いたから。—3) 二通りに
 解される答。「王はこの病
 氣こそ治るであるうが、そ
 れでも死ぬだらう」という
 意味であるう。—4) エリゼ
 オは天賦の預言の能力のお
 かげで、ハザエルの野心満
 々たる計畫や、そのイスラ
 エルにしよとすること、
 及びその偽善を見破つた。
 5) 本一三・七。—6) ハザエ
 ルは表面は謙遜であるが、
 内心は傲慢で野望を藏して
 いる。

一五 て、その主君の許に至りしに、主君「エリゼオ汝に何と云いしか。」と云いたれば、彼は答えぬ、「彼、我に、汝回復すべし。」と云いたり。」と。一五 さて次の日に至り、ハザエル毛布を執りて、之に水を注ぎ、之を王の顔の上に擴げたるに、王死にしかば、ハザエル彼に代りて王となれり。一六 イスラエルの王アカブの子ヨラムの第五年、ユダの王ヨザファトの時に、ユダの王ヨザファトの子ヨラム、王となれり。一七 彼は統治を始めし時三十二歳にして、イエルサレムに於いて八年の間治めたり。一八 彼は、アカブの娘の妻たりしによりて、アカブの家の歩みし如く、イスラエルの王等の道を歩み、主の御眼前に悪を行えり。一九 さて主は、その僕ダヴィドの故に、曾て彼とその裔等とに常に光を與えんと、彼に約し給いし如く、ユダを滅ぼすことを欲み給わざりき。一〇 彼の代に、エドム叛きてユ

の王が病苦を軽くするた
 めに、濡れた布をのせる
 よう望んだのか、それと
 もハザエルが王を窒息さ
 せるつもりでそれをのせ
 たのかは、斷言できない。
 前後の事情から考えれば
 後者の方が眞實らしいが
 s) 代下二一・五。一の本
 章二六節を見よ。アカブ
 の孫娘。イエザベルがア
 カブを左右した如く、ア
 タリアもヨラムと彼らの
 子オコジアを思いのまま
 にした。一〇) 母下七・一
 六。

二二 ダに従わず、己が爲に王を立てたり。¹¹⁾ 三 故にヨラムは自らすべての戦車を

率いて、セイラに至り、夜に起ちてエドム人の己を圍みたるを撃ち、戦車の

長等を破りぬ。是に於いて民その天幕に逃げ入りたり。三 エドムはかく叛き

二二 三 てユダに従わず、今日に至れり。¹²⁾ 其の時ロブナも亦叛きぬ。三三 さて、ヨラ

ムの殘餘の事、及びすべてその爲したる事は、是、ユダの王の歴代史の書に

二四 録されたるに非ずや。三四 やがてヨラムはその父祖と共に眠り、彼等と共に

ダヴィドの市に葬られたり。次いでその子オコジア、彼に代りて王となれり。

二五 即ち、イスラエルの王、アカブの子ヨラムの第十二年に、ユダの王ヨラム

二六 の子オコジア、王となりしなり。¹³⁾ 二六 オコジアは、統治を始めし時二十二歳

なりしが、イエルサレムに於いて一年の間治めたり。その母は、名をアタリ

二七 アと云いて、イスラエル王アムリの娘なりき。¹⁴⁾ 二七 彼はアカブの家の道を歩

みて、アカブの家の爲したる如く、主の御前に悪を行えり。實に彼はアカブ

二八 の家の婿なりき。¹⁵⁾ 二八 また彼はアカブの子¹⁵⁾ ヨラムと共に行き、ガラードの

11) 代下二

一・八。

12) エドム

人はマカ

ベオの時

代まで、

依然とし

て獨立を

守つてい

た。

13) 代下二

二・一。

14) 代下二

二・二。

15) 自分の

母の兄弟

ラモトにシリアの王ハザエルと戦いしが、シリア人、ヨラムに負傷せしめたり。彼は治療の爲イエズラエルに歸りぬ、是、そのシリア王ハザエルと戦いたる時、シリア人に負傷せしめられたればなり。ユダの王ヨラムの子オコジアは、下り行きて、イエズラエルにアカブの子ヨラムを見舞えり、彼其處に病み居たればなり。

第九章

イエフ、アカブの家とイエザベルとを滅ぼさん爲に、注油されて
 イスラエルの王となる―イエフ、イスラエル王ヨラムとユダ王オ
 コジアとを討取る―イエザベル犬に喰わる。

一 一 さて預言者エリゼオ、預言者達の子等の一人を呼びて之に云いけるは、
 二 汝の腰に帶し、汝の手にこの油の小瓶を取りて、ガラードのラモトに行け。
 三 彼處に至らば、ナムシの子なるヨザファトの子、イエフを見るべし。入りて彼
 をその兄弟の中より呼び、之を奥の部屋に連れ行け。1) 次いで油の小瓶を取り
 その頭に注ぎて云え、主、かくぞ曰う、我汝に注油して、イスラエルの王

第九章

- 1) 王上
- 一九・
- 一六。

となしたり。〃と。しかして汝戸を開きて逃げ去れ、其處に留まるべからず。」と。預言者の僕なる若者、乃ちガラードのラモトに行きて、其處に入りたるに、視よ、軍の諸將坐し居たり。よりて彼、^四「將軍よ、我、汝に言うべき事あり。」と云いしに、イエフ、^五「我等一同の中の誰に。」と云いしかば、彼、^六「將軍よ、汝に。」と云えり。茲に於いて、イエフ起ちて部屋に入りぬ。彼その頭に油を注ぎて云いけるは、^七「主イスラエルの天主はかくぞ曰う、〃我は汝に注油して、主の民イスラエルの王となしたり。汝は己が主君アカブの家を討ち滅ぼさん。かくて我、わが僕なる預言者等の血と、主のすべての僕等の血との仇を、イエザベルの手に報いん。即ち我はアカブの家を悉く滅ぼし、アカブの血族なる壁に尿する者は、イスラエルにて閉じ込めおかるる者や、最小さき者をも殺し盡して、^九アカブの家をナバトの子イエロボアムの家の如く、アヒアの子バーサの家の如くにせん。^三」^{一〇}イエザベルをも亦、犬共イエズラエルの畑にて喰わん、

2) この宣告はあらゆる王家に對する斷乎たる天主の御判決である。

(王上一四・一〇のイエロボアム、王上一六・三のバーサ、王上一・二一のアカブ)。一^三王上一五・二九。一六・三。

且之かつこれを葬ほうむる者ものあらざるべし。』と。』しかしして彼、戸とを開ひらき
 て逃にげ去さりぬ。二やがてイエフその主君きみの臣僕等しもべらの許もとに戻もど
 りしに、彼等かれら之これに「すべて無事ぶじなりや、かの狂人きやうじん」⁴⁾何なにの
 爲ためにか汝おんみの許もとに來きたれる。』と云いいしかば、彼、彼等かれらに云い
 けるは、「かの人ひと及びその云いいたる事ことは、汝等なんじらの知しる所ところ
 あり、』と。』二三されど彼等、⁵⁾「それは虚言いつわりなり。寧ろ我等われらに語かた
 れかし。』と云いいたれば、彼かれは之これに云いいぬ、「彼、我われにかく
 かく告つげて、⁶⁾「主しゆはかくぞ曰のたまう、我、汝なんじに注油ちゆうゆして、イ
 スラエルの王おうとなしたり。』と云いえり。』と。』⁶⁾二三 茲こゝに於お
 いて彼等かれら急いそぎて各自おのくその袍うわぎを取り、之これを彼かれの足あしの下したに布しき
 て玉座ぎよくざの如ごとになし、⁷⁾喇叭ラツパを吹ふきて、「イエフは王おうなり。』
 と云いえり。』⁴⁾かくてナムシの子こなるヨザファトの子こ、イエ
 フはヨラムに對たいして陰謀いんぼうを企くわてたり。然しかるにヨラムはすべ

⁴⁾彼があわただしく、まつしぐらにとび出して行つたため。
⁵⁾イエフはかの男がここにいる人々から遣されたと推測したが彼らは之を否定した。—⁶⁾イエフが天主から王に選ばれたのは一つには偶像禮拜に常に反對していたためと、また一つにはいかなる障得にもひるまぬ精力家であつたため。—⁷⁾玉座がなかつたので、彼らは彼を人民に王としてひきあわせるため、これをその家の入口の階段の上へ連れてゆき、袍を下に布いて敬意を表したのである。マテオ二一・七参照。

一五 てのイスラエルと共に、シリア王ハザエルを攻めて、ガラードのラモトを圍みたりしが、⁸⁾ 一五 シリア王ハザエルと戦える間に、シリア人彼に負傷せしめたるに由り、傷を癒さんとしてイエズラエルに歸り居たり。イエフ云いけるは、「汝等もし宜しと思わば、何人も市より脱れ出さべからず、是、行きてイエズラエルに告ぐることのなからん爲なり。」と。一六 彼乃ちイエズラエルに上り行けり、蓋はヨラム病みて彼處にあり、ユダの王オコジアもヨラムを見舞わんとて下り居たればなり。一七 時にイエズラエルの塔の上に立てる番兵、イエフの一團の來るを見て、「一團見ゆ。」と云いけるに、ヨラム、「車を取りて、彼等を迎えに遣り、行く者をして、⁹⁾ すべて無事なりや。」と云わしめよ。」と云えり。

一八 茲に於いて一人の者車に乗りて彼を迎えに行き、「王はかく曰う、¹⁰⁾ すべて平和なりや。」と云いしに、イエフ云いけるは、「平和汝に何の關係かあらん。來りて我に續け。」と。番兵また告げて云いけるは、「使者彼等の許に至りたれど、歸り來らず。」と。一九 更に第二の馬車を遣したれば、その人、彼等の許に

8) 本八二八。

二〇 至りて、「王はかく曰う、^{二一}「平和なりや。」^{二二}と云いしに、イエフの曰く、「平和
 和汝に何の關係かあらん。來りて我に續け。」と。 ^{二三}時に番兵告げて云いける
 は、「彼も彼等の許まで至りたれど、歸り來らず。その車を驅るや、ナムシの
 子イエフが驅る如くにして、實に驀地に進み來る。」と。 ^{二四}ヨラム「車に馬を
 附けよ。」と云いしかば、人々彼の車に馬を附けたるに、イスラエルの王ヨラ
 ムと、ユダの王オコジアと、各自その車にて出で行けり。彼等かくイエフを迎
 えに出で行きて、イエズラエル人ナボトの畑にて之に逢いぬ。 ^{二五}ヨラム、イエ
 フを見るや、「イエフよ、平和なりや。」と云いしが、彼、答えけるは、「何の
 平和ぞ、汝の母イエザベルの姦淫と、その數多の魔法、なおの盛なるに。」と。
^{二六}ヨラム乃ちその手を回して、逃げながらオコジアに曰く、「叛逆なり、オコ
 ジアよ。」と。 ^{二七}折しもイエフ、手に弓を引き絞りて、ヨラムの肩の間を射た
 るに、矢はその心臓を貫きて出でたれば、彼忽ちその車の中に倒れたり。 ^{二八}イ
 エフ、その將バダケルに云いけるは、「彼を取りて、イエズラエル人ナボトの

9) 彼が
 まだ平
 和を得
 ること
 のでき
 ぬ證據

二六 烟はたけに投なげ入いれよ。夫それ、我われは想おもい起おこす、我われと汝なんじと車しやちゆう中ちゆうに坐ざして、彼かれの父ちゆうアカブに従したがいおりし時とき、主しゆこの重おも荷に10)を彼かれの上うえに載のせて、曰のたまいぬ、
 二六 // 寔まことにわが昨きのう日み見たるナボトの血ちとその子こ等らの血ちとの爲ために、// と主しゆ
 二七 ば今いま、主しゆの御みこと言ごの如ごとく、彼かれを取とりて烟はたけに投なげ入いれよ。」と。12) 三七 させてユ
 二八 之これを追おいかけて、「彼かれをも亦また、車しやちゆう中ちゆうに討うつて取とれ。」と云いいしかば、人ひと
 二九 々くイエブラームの邊ほとりにある、ガヴェルの上のぼり坂さかにて之これを討うちけるが、13)
 三〇 彼はマゲツドに逃にげ入いり其そこ處こにて死しせり。二八 によりてその臣しもべ僕ら等ら、彼かれを
 その車くるまに載のせてイエルサレムに運はこび行ゆき、ダヴィドの市まちにてその父ふそ祖そ
 と共ともに、之これを墓ほかに葬ほうむりたり。二九 アカブの子こ、ヨラムの第だい十じゅう一いち年ねんに、オ
 コジア、ユダの王おうとなれり。三〇 次つぎいでイエフはイエズラエルに至いたりぬ。
 然しかるにイエザベル、彼かれの入いり來きたる由よしを聞ききて、その眼めをアンチモニ

10) イザヤが不幸の預言であることを云いあらわすために、時々使つた語

11) イエフは、自分の命令が勝手氣儘なものではなく、

12) 王上二一・一九。天主の刑罰の執行であることを示すために、主の御言を引用する。

13) 重傷を負わせた

三二 黛にて隈取り、その頭を飾りて、窓より眺め居たるが、三イエフの
 門より入り來りし時、云いけるは、「己が主君を弑したるザンブリ
 三三 に、平和あるを得んや。」と。14) 三三時にイエフ顔を擧げて窓を仰ぎ、
 「是は誰なりや。」と云いしに、宮人二三人、彼に向かいて敬禮せ
 三三 り。三三彼之に云いけるは、「その女を下に投げ落せ。」と。彼等乃ち
 彼女を投げ落したれば、血、壁に沫きかかり、馬の蹄之を蹂躪り
 三三 ぬ。15) 三四かくて彼、入り來るや、且食し且飲みて云いけるは、「行
 きてかの呪われたる女16) を見、之を葬れ、そは王の娘なればなり。」
 三五 と。三五よりて彼等女を葬らんとて行きしに、髑髏と、兩足と、兩手
 三六 の尖との外は見當らざりしかば、三六彼等戻りて彼に告げたり。イエ
 フ云いけるは、「是こそ主がその僕テスベ人エリアによりて告げ給
 三七 える御言なれ、曰く、〃犬共イエズラエルの畑にて、イエザベルを
 喰わん。17) 三七しかしてイエザベルの屍體はイエズラエルの畑中の糞

14) かの女は威嚇のため、イエフがザンブリの知く、王を弑したることによつて自ら招く天罰を彼に教えるつもり。―王上一六・一〇。―15) アカブ一家の罪は、イエザベルで極點に達した。かの女の死も天罰の最も恐ろしいものであつた。―16) 天主の御呪咀のかかつている人。―17) 王上二一・二三。

土の如く地の表にあらん。かくて通行者、
「是がかのイエザベルなりや。」と云わん。」
と。

第 十 章

イエフ、アカブの家を滅ぼす—彼バールの禮拜者を殺したれど、
イエロボアムの金の櫃に事う。

一 一 さてアカブには、サマリアに七十人の子ありき。¹⁾ さればイエフ、書簡を認めてサマリアに送り、市の重立てる人々と、長老等と、アカブの養育係²⁾ たちとに宛てて、云い遣しけるは、
「汝等その主君の子等を擁し、車や馬、堅ある市や武器を有する者、この書簡を受取らば直に、³⁾ 汝等の主君の子等の中より、最も優れ、且汝等の意に適う者を選び出して、之をその父の王位に即け、以て汝等の主君の家の爲に戦えかし。」³⁾ と。⁴⁾ されど彼等太く恐れ
て云いけるは、「視よ、二人の王も彼の前には得耐えざりしを、

第十章 1)「子」とは、「子孫」という廣い意味。—2)アカブの王子たちを養育した人々。
3)イエフは兵士の一隊を率いてサマリアにゆく前に、住民の心を探らうと思つた。

五

六

七

八

九

いかで我等抗するを得んや。」と。五 茲に於いて、家を宰る者、市を治むる者、長老、養育係たち、イエフの許に人を遣して、云わしめけるは、「我等は汝の僕なり。汝の命じ給う事は何にても之を爲さん。我等はまた自ら我等のために王を立てじ。すべて汝の意に適う所を爲し給え。」と。六 時に彼、再び彼等に書簡を認めて云いけるは、「汝等もし我に與し、我に従わんとせば、汝等の主君の子等の首を取りて、明日のこの時刻にイエズラエルなるわが許に來れ。」と。さて、王の子等は七十人あり、市の重立てる人々の許にて養育され居たりしが、七 その書簡彼等の許に至るや、彼等王の子等を捕えて七十人⁴⁾ながら殺し、その首を籠に入れて、イエズラエルなる彼の許に送れり。八 即ち使者來りて、彼に告げて、「人々王の子等の首を持ち來れり。」と云いけるに、彼は答えぬ、「明朝まで、門の入口の傍に之を二山となして積みおけ。」と。九 夜明け放るるや、彼出でて立ち、すべての民に云いけるは、「汝等は義し。5) 我はわが主君に對して謀叛を企て、

4) 七十という数が三度繰返してあるのは天主が前以て仰せられた如く、アカブの多数の子孫の中一人も残らなかつたことを示すため。
5) 周囲の人々にはこの殺戮の責はなかつたが、イエフは自分も義しいと言明する自分はたゞ、天主が豫め預

一〇 彼を殺したりと雖も、是等を皆殺したるは誰ぞや。一〇されば汝等今こそ悟れ、主の御言、即ち主がアカブの家に就きて告げ給いし事の、一として地に落ちず、⁶⁾ 主がその僕エリアの手によりて告げ給いし所を成就し給えるを。」との。二 かくイエフはイエズラエルにあるアカブの家の残れる者を悉く殺し、その重立てる人々、親友及び司祭をすべて殺しければ終には彼に關係ある者、一人も残らざるに至りぬ。三 次いで彼は、起ちてサマリアに行きしが、途中羊飼等の屯所に至りし時、二三 ユダの王オコジアの兄弟等に逢いて、之に「汝等は誰ぞ。」と云いたるに、彼等「我等はオコジアの兄弟にして、王の子等と后の子等とに挨拶せんとて下り來れるなり。」と答えたり。一四 彼、「彼等を生擒にせよ。」と云いしかば人々彼等を生擒にして、屯所の傍なる井戸の所にて彼等四十二人を絞殺し、その一人をも残さざりき。一五 さて彼は其處を去るや、レカブの子ヨナダブが己を迎うるに逢い、之を祝して⁷⁾ 彼に「わが心の汝の心に對

言者エリアを通じて、天罰としてお告げになつていたことを、遂行したに過ぎないから、といふのである。
 ①) 成就せずはない。一〇) 王上二一・二九。
 ②) レカブはキン人。レカブの子は謹嚴な行狀で卓抜した人であつた。一〇) 之に挨拶して。

一六 する如く、汝の心も誠實なりや。」と云いしに、ヨナダブ、「然り。」と云いし
 一七 かば、彼、「もし然らば汝の手を與えよ。」と云いて、その手を與うるに及び、
 一八 之を車に引上げて己が傍に乗せたり。一六しかして彼に云いけるは、「我と共に
 一七 來りて、主に對するわが熱心を見よ。」と。かくてその車に乗せて、一七サマリ
 一八 アに連れ行き、アカブの血族のサマリアに残れる者を悉く殺して、一人だに殘
 一九 さざりき、即ち主がエリアによりて告げ給える御言の如し。一八茲に於いてイエ
 二〇 フ、すべての民を集め、之に云いけるは、「アカブは些かバールに仕えしかど、
 二一 我は一層之に仕えんとす。10) 一九されば今、バールのすべての預言者と、そのす
 二二 べての僕と、そのすべての司祭とを、わが許に召し出せ、一人だに來らざる者
 二三 あるべからず。蓋は我、わがためにバールに大いなる犠祭を献げんとすればな
 二四 り。缺席する者は何人と雖も生かしおかじ。」と。蓋しイエフは、バールに事
 二五 する者共を滅ぼさんとして、詭りてかく爲したるなり。二〇彼なお「バールの爲に
 二六 祭目を設けよ。」と云いて、之をふれしめ、二更にイスラエルの四方の境にま

10) 王上

一六・

三一。

二三 人で遣しければ、バールの僕等皆來りて、來らざる者は一人だにあらざりき。かくて彼等、バールの神殿¹¹⁾に入りたれば、バールの家は端より端まで充ち満ちたり。三時に彼、衣裳を掌る者に、^{三三}「バールの僕等一同の爲に衣服を出し持ち來れ。」と云いしかば、彼等その爲に衣服を出し持ち來れり。

二三 やがてイエフ、レカブの子ヨナダブと共に、バールの神殿に入りて、バールに仕うる者共に云いけるは、「もしや汝等と共に誰か主の僕の居ることなきか、査べ見よ、是、ただバールの僕のみ茲に居らん爲なり。」と。 ^{三四}かくて

二四 彼等は犠牲と燔祭とを献げんとて入りぬ。時にイエフ、己が爲に八十人を外に備え置き、之に云いけるは、「わが汝等の手に引渡したるこの人々の中、一人だに遁るるあらば、その生命に代うるに逃せる者の生命を以てすべし。」と。 ^{三五}かくて燔祭の終りし時のことなりき、イエフ、その將士に命じて、

二六 「入りて彼等を討ち取れ、一人をだに遁すなかれ。」と云いしかば、將士彼等を劍の刃にかけて殺し、之を投げ出してバールの神殿の市に入り、¹²⁾ ^{三六}バ

11) アカブが建てた王上一六・三二參照。
12) バールの司祭達を殺すことは律法に背かなかつたであらうがイエフはそれを守る熱心でなく、私慾に驅られたので

二七 ールの神殿より像を取り出して焼き、^{二七}之を砕けり。彼等はまたバールの家をも毀ちて、その代りに厠を造りしが¹³⁾これは今日に至るまで在り。二八 かくの如くにして、イエフはイスラエルよりバールを滅ぼし盡せり。^{二九}然れども彼は、ナバトの子にしてイスラエルに罪を犯さしめたる、イエロボアムの罪より離れず、ベテル及びダンにある黄金の犢をば棄てざりき。¹⁴⁾ ^{三〇}茲に主イエフに曰いけるは、「汝わが眼に義しく悦ばしき事を熱心に行い、且すべてわが心にある事をアカブの家に對して爲したるにより、汝の子等は四代までイスラエルの王位に即かん。」¹⁵⁾ ^{三一}然るにイエフは、心を盡して主イスラエルの天主の律法に循い歩むことに意を用いず、イスラエルに罪を犯さしめたるイエロボアムの罪より離れざりき。^{三二}その頃主はイスラエルのを厭い始め給えり。さればハザエル、イスラエルの四方の境に

あつて、ただそれのみに動かされて、欺瞞策を取つたのである。—¹³⁾その場所を最もひどく辱しめるために。—¹⁴⁾恐らくイエロボアムがこれを安置したのと同じ政治的理由から。—王上一二・二八。¹⁵⁾本一五・一二。イエフの恐ろしい流血の殺戮を賞讃するのではない、それはオゼーが既に有罪と断定している(何一・四)。ただバール教の撲滅と、バール崇敬を盛にしたアカブの家に對するイエフの闘いを稱するだけ。

三三 彼等を討ち、三三ヨルダンより東の方、ガラードの全地、ガド、ルベン、マナツセに至り、アルノン川の邊にあるアロエルより、ガラード、バサンに及びぬ。三四 さて、イエフの殘餘の事、その爲したる一切、及びその武勇は、是、イスラエルの王の歴代史の書に
三五 録されたるに非ずや。三六 やがてイエフ、その父祖と共に眠りしかば、人々之をサマリ
三六 アに葬りたり。次いでその子ヨアカズ彼に代りて王となれり。三六 イエフがサマリヤに於いてイスラエルを治めたる日數は二十八年なりき。

第十一章

アタリア王位を奪い虐政を布く—ヨアス王に奉戴せらる。

一 さてオコジアの母アタリアは、己が子の死せるを見、起ちて王の胤を悉く殺せり。1) 二されどヨラム王の娘にして、オコジアの姉妹なるヨサバ、2) オコジアの子ヨアスを取り、之を王の子等の中より、彼等が殺されし時窺かに取りて、その乳母と共に食堂よ

第十一章 1) かの女はアカブとイエザベルとの娘たるに應わしく、自ら支配せん爲實のわが子オコジアの胤を悉く殺した。—代下二二・一〇。—2) 異母姉妹と思われる。かの女は大司祭ヨヤダの妻であつて、自分の家にヨアスを隠した。

三 したりき。三 彼は彼女と共に六年の間、主の家に潜み居たり。3) しかしてアタリア國を治めたり。四 然るに七年目に至り、ヨヤダ人を遣して百夫長等及び兵卒等を迎え、主の聖殿に導きて己が許に來らしめ、之と盟約を結び、且主の家に於いて彼等に誓わしめ、4) 之に王の子を示し、五 彼等に命じて云いけるは、「是こそは汝等の爲すべき事」5) なるれ。六 汝等の三分の一は、安息日に入りて、王の家に於て警護を爲し、また三分の一はスールの門に居り、三分の一は楯持の住居の後にある門に居りて、メツサの家の6) を警護すべし。七 更に汝等、すべて安息日に出で行く者の二分隊は主の家に於て、王の周圍にありて警護せよ。7) 八 即ち汝等、己が手に武器を持ち、彼を圍むべし。しかして誰かもし聖殿

3) 若君はこの一時的な隠れがから、間もなく聖殿に隣接する部屋の一つに移された。—4) 彼らが王子を保護し、その間秘密を守るということ。—5) 原語 Sermo 「言」。6) ヨアスの家らしい。—7) 聖殿及び王の館の入口を、こうして全く警戒させ、誰も外から來ることができぬようにした。ヨヤダが衛兵の交替日を定めたのは、抵抗する者があつた場合、交替する兩方の兵士等を早速用いることができるため。

九

一〇

一一

一二

一三

一四

一五

の關^{せき}を越^こゆる者^{もの}あらば、之^{これ}を殺^{ころ}すべし。かく汝^{なんじら}等、王^{おう}と共^{とも}に出^で入^{いり}すべし。」と。九 百夫長^{ふちようら}等乃^{すなわ}ちすべて司祭^{しさい}ヨヤダが彼^{かれら}等に命^{めい}じたる如^{ごと}くに爲^なし、各自^{おのく}その部下^{ぶか}の、安息日^{あんそくじつ}に入る者^{もの}、及び安息日^{あんそくじつ}に出^いずる者^{もの}を率^{ひき}いて、司祭^{しさい}ヨヤダの許^{もと}に至^{いた}りしに、一〇 彼^{かれしゆ}主^{しゆ}の家^{いえ}にある、ダヴイド王^{おう}の槍^{やり}と武器^{ぶき}とを、10) 彼^{かれら}等に與^{あた}えたり。11) 二茲^{こゝ}に於^おいて彼^{かれら}各自^{おのく}その手^てに武器^{ぶき}を持ち、王^{おう}の周圍^{まわり}に、聖殿^{せいでん}の右側^{みぎがわ}より、祭壇^{さいだん}及び家^{いえ}の左側^{ひだりがわ}まで、立^たてり。一二 時に彼^{かれ}、王^{おう}の子^こを前^{まえ}に連^つれ來^{きた}りて、之^{これ}に冠^{かんむり}を戴^{いた}かしめ、證詞^{あかし}12) を付^{わた}したり。かくて人々^{ひとぐ}之^{これ}を王^{おう}となして油^{あぶら}を注^そぎ、手^てを拍^うちて、「王^{おう}よ、壽長^{いのちなが}かれ。」と云^いえり。一三 然^{しか}るにアタリア、民^{たみ}の馳^はせ集^{あつ}まる物音^{ものおと}を聞^きき、主^{しゆ}の聖殿^{せいでん}に入^いりて群衆^{ぐんしゆ}の許^{もと}に至^{いた}りしに、一四 王^{おう}が慣例^{かんれい}に循^{したが}いて、壇^{だん}の上^{うえ}に立^たち、その傍^{かたわら}に歌^{うた}手^{たいて}あり喇叭^{ラッパ}あり、國民^{こくみん}舉^{こぞ}りて歡喜^{かんき}し、喇叭^{ラッパ}を吹^ふき鳴^ならせるを見^みたれば、己^{おの}が衣服^{ころも}を裂^さきて、13) 「謀叛^{むほん}なり、謀叛^{むほん}なり。」と叫^{さけ}びぬ。一五 その時^{とき}ヨ

8) 衛兵が配置されて
いる所。 — 9) 王が聖
殿を出て王宮に入る
時。 — 10) 多分ダヴィ
ドが奉納した鹵獲物
たる武器。 — 11) 代下
一六・二二。 — 12) 證
詞すなわち律法の複
寫を手交されるのは
新たに王となる人に
は誰にも必要なこと
であつた。申一七・
一八を見よ。 — 13) 本
六・三〇のヨラム同
様驚愕恐怖のあまり

一六 ヤダ、軍の上うへに立つ百夫長等ふちやうらに命じて、云いいけるは、「之これを聖殿せいでんの關せきの外そとへ引き出せ、しかして之これに従したがう者ものをば悉ことごとくく劍つるぎもて殺ころすべし。蓋けだし司祭しさいは、
 「主しゆの聖殿せいでんの中なかに於おいては殺ころすべからず。」と云いいおきしなり。一六よりて
 彼等かれらは彼女かのおんなに手てを下くだし、宮殿きゆうでんの邊ほとりにある馬うまの入いる道みちより之これを引ひき行ゆきしが
 彼女かのおんな其處そこに於おいて殺ころされたり。一七 茲こゝに於おいてヨヤダは、主しゆと王おうと民たみとの間あいだ
 に、彼等かれらが主しゆの民たみたるべしとの契約けいやくを結むすび、また王おうと民たみとの間あいだにも然しかなし
 たり。一八 次ついで國くにの民たみ皆みなバールの神しん殿でんに入いり行ゆき、その祭壇さいだんを毀こぼち、その
 神像しんぞうを全まく打碎うちくだけり。彼等かれらはまた、バールの神官しんかんマタンをも、祭壇さいだんの前まえに
 一九 て殺ころしぬ。しかして司祭主しさいしゆの家いえに監守まもるものを置おけり。一九さて彼かれは百夫長等ふちやうらと、
 ケレト人びとおよ及びフエルト人びとの隊たいと、國くにのすべての民たみとを率ひきい、彼等かれら主しゆの家いえよ
 二〇 り王おうを導みちびき下くだり、楯持者たてもちの門もんの道みちより宮殿きゆうでんに至いたるに及および、彼かれ、王位おういに即つき
 たり。二〇かくて國民こくみん舉こぞりて歡よろこび、市まちは泰平たいへいとなれり。アタリアは王おうの家いえに
 二一 て、劍つるぎもて殺ころされぬ。14) 二ヨアスは統とう治ちを始はめし時とき、七歳さいなりき。

14) 天主を棄てたアカブの家最後の一員はこうして滅ぼされ、再びダヴィド家が王位に即くに至つた。母下七・一三などの御約束の通りである天主は一人の乳呑兒を救つて、ダヴィドの家を維持するすべを御存じであつた。

第十二章

聖殿の修復—ハザエル、イエルサレムを攻撃せんとしたれど、
金品を得てこれをやむ—ヨアス殺さる。

一 イエフの第七年に、ヨアス政事を執り、イエルサレムに於いて四十年の間
 治めたり。その母は名をセビアと云いて、ベルサベ—の出身なりき。二ヨア
 スは、司祭ヨヤダが之に教えし日の限り主の御前に義しきを行いたり。三然
 れども高き處は、取除かざりき。即ち民なおその高き處に於いて犠牲を献げ
 香を焚きしなり。四ヨアス、司祭等に云いけるは、「すべて参詣人が主の聖殿
 に持ち來る淨財は¹⁾生ける者の贖いに献ぐるものも、自發的に己が志より
 主の聖殿に持參するものも、五司祭等その規定に循いて之を受納し、凡そ修
 理を要する所を見ば、家の破損を修復すべし。」と。六されどヨアス王の第二
 十三年まで、司祭等は聖殿の破損を修復せざりき。七さればヨアス王は、大
 司祭ヨヤダ及び司祭等を召し、之に云いけるは、「汝等何故に聖殿の破損を

第十二章

1) 祭日の

参詣には
誰も空手
で聖殿に
ゆくこと
はできな
かつた。
(申一六
・一六)。

八 修復せざるか。されば最早汝等の規定に循い金を受納せずして、聖殿の修復の爲に之を差出すべし。」と。八かく司祭等はその後民より金を受くることと、家の破損を修理することとを禁ぜられたり。九次いで大司祭ヨヤダ一つの賽銭箱を取り、上に孔を穿ちて、之を祭壇の傍、主の家に入る者より見て右方に置けり。2) されば門を守る司祭等、主の聖殿に持參せらるる金を、悉くその中に入れたり。一〇ざるほどに、その賽銭箱の中に夥多しき金あるを見るに及びて、王の書記官3) と大司祭と上り來り、主の家に得られたる金を傾出して算え、二之をその數と量とに應じて、主の家の建築工の上立つ者に與えたるに、彼等はまた主の家に働く大工と石工とに之を拂い渡して、三破損を修理したり。即ち石を切る者にも與え、木材と切るべき石材とをかう爲にも用い、かくて家の修復に費用を要するあらゆるものを以て、主の家の修復をなしとげんとせり。三然れども主の家の水瓶、肉叉、香爐、喇叭、及び金銀の諸々の器具は、この金、即ち主の聖殿に持

2) 王の希望に應じて。第二の聖殿では、賽銭箱は、婦人も入れることが出来るように、婦人の庭に持參した
3) 聖殿の修復は司祭の單なる私事ではない。

一四 参せられたる金を以ては造らざりき。一四 即ちそは、主の家を修復せん
 爲に、仕事を爲す者に與えたるなり。一五 また金を受取りて之を職人に
 拂う人々と決算することもせざりき。されど彼等は之を忠實に取扱ひ
 たり。一六 但し過失の爲の金と、罪の爲の金とは、主の聖殿に持参せ
 ざりき。そは司祭等のものなりしが故なり。一七 その頃⁵⁾ シリアの王
 ハザエルは、上り來り、ゲトと戦いて之を取り、更にイエルサレムに
 上らんとてその面を向けたり。一八 この故にユダの王ヨアスは、すべて
 の聖物、即ちその父祖なるユダの諸王、ヨザファト、ヨラム、オコジ
 ア等が奉納せる物、⁶⁾ 及び己が献げたる物、ならびに主の聖殿と王の
 宮殿とに見るを得るすべての銀を取りて、シリアの王ハザエルに遣り
 しかば、彼イエルサレムより退きたり。一九 さて、ヨアスの殘餘の事、
 及びその爲したる一切は、是、ユダの王の歴代史の書に録されたるに
 非ずや。二〇 然るにその臣僕等、起ちて同志の間に謀叛を企て、セラの

4) 修復工事が完了してもまだ金が残つていたので、それは金銀の器具の製作に用いた。

5) ヨヤダ既に死して、ヨアスが天主に背いた頃。

6) この人々は天主の祭祀と並んで、パール崇敬を始めたが、主の祭を廢止せず、折にふれて自ら聖殿に物を奉納した。

下り坂にあるメロの館にヨアスを討て
り。三即ちセマートの子ヨサカルと、
その僕、ソメルの子ヨザバド、彼を討ち
しなり。かくて彼死しければ、人々ダヴ
イドの市に、之をその父祖と共に⁸⁾葬り
たり。次いでその子アマシア、彼に代り
て王となれり。

第十三章

イスラエル王ヨアカズ及びヨアスの治世—預言者エリゼオ最後の所行
とその死—死者エリゼオの骨に觸れて蘇る。

一 ユダの王オコジアの子ヨアスの第二十
三年に、¹⁾ イエフの子ヨアカズ、イスラ
エルの王となり、サマリアにあること十

⁷⁾ 彼はヨヤダの忠告が得られる間は正しい道を踏んでいたが、その死後アスタルテなどを祀ることを許し、ヨヤダの子で、彼に警告し不幸を豫言した預言者ザカリヤを投石の刑に處せしめた。こういう事がすべて謀叛の因となつた。—⁸⁾ 代下二四・二五によれば、ヨアスは列王の墓所に葬られなかつた。それでこの「その父祖と共に」は「その父祖の近くに」の意。代下二六・二三参照。

第十三章

¹⁾ ヨゼフス・フラヴィウスによれば、ヨアカズが統治を始めたのは、ヨアスの第二十年のことであると。

二 七年に及べり。彼は主の御前に悪を行い、イスラエルに罪を犯
 さしめたる、ナバトの子、イエロボアムの罪に倣いて、之を離れ
 三 ざりき。されば主の御震怒、イスラエルに對して火と燃え、終
 始之をシリア王ハザエルの手と、ハザエルの子ベナダドの手とに
 四 付し給いたり。されどヨアカズ、主の御顔に願ひ求めたれば、
 主之に聽き給えり、即ちシリアの王彼等を苦しめたれば、イスラ
 五 エルの困窮を憐れ給ひしなり。主乃ちイスラエルに救濟者³⁾
 を與え給ひしかば、彼等シリア王の手より救ひ出されたり。かく
 てイスラエルの裔等は、昨日及び一昨日の如く、その天幕に住め
 六 り。然れども彼等は、イスラエルに罪を犯さしめたる、イエロ
 ボアムの家の罪を離れず、之が中に歩みたり。蓋はサマリアにな
 七 お並木⁴⁾残り居たればなり。茲に、ヨアカズには民の中、騎兵
 五十人、戰車十輛、歩兵一万人の外、残りおらざりき。蓋し、シ

2) ダマスコの列王表中のベナダド三世。ベナダド一世はバーサと同時代の人であり(王上一五・一八一二〇參照)。ベナダド二世はアカブと戦つた(王上二〇章)。— 3) この救濟者はヨアス。彼はシリア人の手から、その征服したイスラエル人の町々を悉く取り戻した一九—二五節を見よ。
 4) アカブがアスタルテのために設けた。

八 リアの王彼等を殺して、打禾場の塵埃の如く蹂躪りしなり。⁵⁾八さて、ヨアカズの
 九 史の書に録されたるに非ずや。九やがてヨアカズその父祖と共に眠りしかば、
 一〇 ユダの王ヨアスの第三十七年に、ヨアガズの子ヨアス、彼に代りて王となれり。
 一 二 彼は主の御眼前に悪しき事を爲し
 三 ず、之が中に歩みたり。二三さて、ヨアスの殘餘の事、その爲したる一切、及び
 四 其のユダ王アマシアと戦いし武勇は、是、イスラエルの王の歴代史の書に録さ
 五 れたるに非ずや。二三やがてヨアスは其の父祖と共に眠りぬ。よりてイエロボア
 六 ムその王位に即けり。ヨアスはイスラエルの諸王と共に、サマリアに葬られた
 七 り。一四時にエリゼオは死病を患い居りしが、イスラエルの王ヨアス、彼の許に
 八 下り來り、その前に泣きて曰、云いけるは、「わが父よ、わが父よ、イスラエル

5) 本八
 一二一。 6) 彼は
 惡事は
 したも
 のの、
 天主の
 預言者
 には信
 仰と信
 頼の念
 を有し
 ていた

一五 の戦車よ、その馭者よ。」と。一五 エリゼオ彼に云いけるは、「弓矢を取り來れ。」と。しかしてその己が許に弓矢を取り來るや、一六 彼、イスラエルの王に「その弓に汝の手をかけよ。」と云いしかば、王その手をかけたるに、エリゼオ、王の手の上に己が手をかけて、一七 東の窓を開け。」と云えり。よりて彼、それを開きしに、エリゼオ「矢を射よ。」と云いたれば、乃ち射たり。時にエリゼオ云いけるは、「主の救拯の矢、シリアに對する救拯の矢なり。汝アフエクに於いてシリアを撃破り、遂に之を滅ぼし盡さん。」と。一八 彼また「矢を取れ。」と云いしかば、すなわち取りたるに、累ねて之に、「その矢を以て地を撃て。」と云えり。よりて三度撃ちて、佇みおりしに、一九 天主の人彼に怒りて云いけるは、「汝もし五度、六度、もしくは七度も撃ちたりせば、シリアを討ちて全滅に至らしめしならんに。されど今は之を撃破ること三度なるべし。」と。

二〇 かくてエリゼオ死したれば、人々之を葬りぬ。然るにその年モアブ

7) 王はエリゼオを、曾てそのエリゼオがエリアをよんだようにイスラエルの戦車、また馭者とよぶ。一8) エリゼオはアカブの治世から既に預言者として召されていたので、少くとも五十年間その職務を果たし、その後高齢で死んだのである。その病床にあり臨終の際にも、彼は今一

三二 より、盜賊等國に來れり。三折しも或人を葬りつつありし人々

盜賊等を見て、その屍をエリゼオの墓に投げ入れしが、エリゼ

オの骨に觸るるや、その人蘇りて、己が脚もて立ち上れり。10)

三三 さて、シリアの王ハザエルは、ヨアカズの目の限りイスラエ

ルを苦しめけるが、三三主、そのアブラハム、イサーク、ヤコブ

と結び給える契約故に、彼等を憐み、之が許に歸り給い、現時

まで彼等を滅ぼすことをも、全く棄つることをも、欲し給わざ

りき。三四 やがてシリアの王ハザエル死したれば、その子ベナダ

ド彼に代りて王となれり。三五 時にヨアカズの子ヨアス、ハザエ

ルが己の父ヨアカズの手より取りし邑々を、ハザエルの子ベナ

ダド¹¹⁾の手より取り戻したり。即ちヨアス三度彼を撃ち破りて

その市々をイスラエルに取り戻したるなり。

度イスラエルの救済者たる實を示した。――1)のパレ

スチナでは死者を普通棺に入れずに埋葬する。そ

れで直接觸れたのである。10) 天主がこの奇蹟を行い

給うたのは、王をして、自分に與えられたシリア

人に勝つという約束が必ず果たされるとの信賴の

念を固めさせるためであつたに相違ない。――集四

八・一四。――11) 三節の註二參照。

第十四章

アマシヤ、ユダの王となる―彼エドム人に勝ちたれど、イスラエル王
 ヨアスに敗る―イエロボアム二世イスラエルの王となる。

一 イスラエル王、ヨアカズの子、ヨアスの第二年に、ユダ王、ヨアスの子、
 アマシヤ王となれり。二 彼、統治を始めし時、二十五歳なりしが、イエルサ
 レムに於いて二十九年の間治めたり。その母は名をヨアダンと云いて、イエ
 ルサレムの出身なりき。三 彼は主の御前に義を行えり、然れどもその父ダヴ
 イドの如くには非ざりき。彼は萬その父ヨアスの爲したる如くに爲せり。
 四 但高き處のみは取除かざりき。即ち民なおその高き處に於いて犠牲を献げ
 香を焚き居たるなり。五 彼は王位を得し時、己が父王を殺したるその臣僕等
 を討ち取りしが、六 その殺したる者共の子等は殺さざりき。是、モイゼの律
 法に録されたる所に循い、主が命じて、「子の爲に父を死に致すべからず、
 父の爲に子を死に致すべからず、各人己が罪の爲に死すべし。」と曰いし如

第十四章

1) 代下二

五・一。

2) 本一二

・二〇。

七 くになしたるなり。³⁾ 彼は塩の谷⁴⁾に於てエドム人一万を
 殺し、戦いて岩⁵⁾を取り、その名をイエクテヘル⁶⁾と稱び
 八 て今日に至れり。ハその頃のアマシア、イスラエル王、イ
 エフの子なるヨアカズの子、ヨアスの許に使者を遣し、
 九 「いざ、我等相見えん。」と云わしめたり。⁸⁾ イスラエル
 王ヨアス、ユダ王アマシアに折返し云わしめけるは、「リ
 バノンの薊、リバノンにある杉の許に、⁹⁾ わが子に汝の娘
 を妻として與えよ。」と云い遣りしに、リバノンにある森
 一〇 の獸等、通りて薊を踏み躪れり。一。汝はエドムを征服えた
 れば、心驕れり。その榮譽に満足して、己が家に坐しお
 れ。汝何故に災禍を招きて、汝もユダも共に仆れんとする
 二 か。」と。二されどアマシア聽従わざりしかば、イスラエ
 ル王ヨアス、上り行き、彼とユダ王アマシアと、ユダの邑

3) 申二四・一六。結一八・二〇。
 —小アジアでは随分珍らしい寛
 大な處置。記述者はその信仰と
 モイゼの律法遵守との精神によ
 つて、若年の王がそうする氣に
 なつたことを附記する。—4) 死
 海の南端に位し、幅約二マイル
 に及ぶ塩原。—5) ペトラ(セラ)
 即ち岩という町は塩の谷の南方
 にある。—6) 「天主の御庇護」の
 義。—7) エドム人に勝利を得た
 後。—8) 九節から察すると、ヨ
 アスがその娘をアマシアに與え
 ることを拒んだ、その結果とし
 ての正式な宣戰通告。

一三 ベトサメスに於いて相見えたり。一三 然るにユダ、イスラエルに撃破られて
 各人その天幕に逃げ入りぬ。一三 イスラエル王ヨアス、乃ちベトサメスに於
 いて、オコジアの子なるヨアスの子ユダ王アマシアを捕え、之をイエルサ
 レムに曳き行けり。の) しかしてイエルサレムの石垣を、エフライム門より
 一四 隈の門に至る四百クビトの間毀ち、一四 主の家と王の寶庫とにあるすべての
 金銀、すべての器具を取り、また人質を取りて、サマリアに歸りぬ。10)
 一五 さて、ヨアスが爲したる殘餘の事、及びそのユダ王アマシアと戦いし武
 一六 勇は、是、イスラエルの王の歴代史の書に録されたるに非ずや。一六 やがて
 ヨアスはその父祖と共に眠り、イスラエルの諸王と共にサマリアに葬られ
 一七 たり。次いでその子イエロボアム、彼に代りて王となれり。一七 されどユダ
 王ヨアスの子アマシアは、イスラエル王ヨアカズの子ヨアスの死したる後
 一八 十五年生き存えたり。一八 さて、アマシアの殘餘の事は、是、ユダの王の歴
 一九 代史の書に録されたるに非ずや。一九 時にイエルサレムに於いて彼に謀叛を

の) 勝利者に曳かれて、自分の都に入るのは、ユダの王にとつて甚だしい恥辱。
 10) アマシア王を廢し、ユダ王國を併合することともでき
 たであるうが
 天主はダヴィドに對するお約束を顧み、これを止め給うた。

二〇 企つる者共ありしかば、¹¹⁾ 彼はラキス¹²⁾に逃げしが、彼等その後よりラキスに人を遣し、其處にて彼を殺せり。二〇しかしこれ¹³⁾を馬に載せ來り、かくて彼はイエルサレムに於いてその父祖と共に、ダヴィドの市に葬られたり。二三茲に於いてユダの民は、擧りて十六歳のアザリアを取り、之を立ててその父アマシアの代りに王となせり。¹⁴⁾ 二三彼はかの王がその父祖と共に眠りし後、エラトを建てて、之をユダに取戻したり。¹⁵⁾

二三 ユダの王、ヨアスの子、アマシアの第十五年に、イスラエルの王ヨアスの子イエロボアム、王となり、サマリアにあること四十一年に及べり。二四彼は主の御前に悪しき事を爲し、イスラエルに罪を犯さしめたる、ナバトの子、イエロボアムの諸々の罪を離れざりき。二五彼はエマトの入口より荒野の海に至るイスラエルの領土を取戻せり、¹⁶⁾ 即ち主イスラエルの

11) 代下二五・二七によればアマシアの偶像禮拜に趨つたことが、謀叛を招いたのらしい。—12) ラキスは今日のテル・エルヘシらしく、パレスチナ南部の低地にあつた。—13) 多分彼自身の王専用の馬車にのせて。
 14) アザリアはオジアとも云う。—代下二六・一。
 15) エラトはアラビア灣の東端にあるエドム人所屬の港市で、彼の父アマシアはまだ之を征服していなかつた
 16) かくしてダヴィド及びサロモン時代の如く、領地を回復した。

二六 天主てんしゆが、アマテイスの子こにして、オフェルおに在あるゲト出身しゆつしんの預言者よげんしや、その僕しもべヨナによりて告つげ給たまへる御言みことばの如ごとし。17) 二六 實じゆに主しゆは、イスラエルの艱難かんなんのいと辛つらきと、彼等かれらが獄いとやとじこに幽閉ひとやとじこめられたる者ものや最ももつと下賤いやしき者ものまで、滅ほろび盡つくしたることと、イスエルを助たすくる者ものの一人ひとりだになかりしこととを憐みそなわし給たまへり。二七 されば主しゆは、天下あめがしたよりイスラエルの名なを抹消けしきらんとは曰のたまわず、却かえつてヨアスの子こイエロボアムの手てにより彼等かれらを救すくい給たまいぬ。二八 さて、イエロボアムの殘餘ほかの事こと、その爲なしたる一切さい、その戰たたかいし武勇ぶゆう、及びその如何いかにしてダマスコとユダのエマトとをイスラエルに取戻とりもどしたるかは、是これ、イスラエルの王おうの歴代史れきだいしの書ふみに録かきしるされたるに非あらずや。二九 やがてイエロボアムはその父祖ふそなるイスラエルの諸王しよおうと共に眠ねむり、その子こザカリア、彼かれに代かわりて王おうとなれり。

第十五章

ユダに於けるアザリア及びヨアタンの治世と、イスラエルに於けるザカリア、セルム、マナヘム、ファケヤ、及びファケ一の治世。

17) 拿一・一。 預言者 ヨナの 郷里ゲト・オフェル はナザレトの北東にあつた

一 イスラエル王イエロボアムの第二十七年に、ユダ王アマシアの子アザリア王となれり。二 彼は統治を始めし時、十六歳なりしが、イエルサレムに於いて五十二年の間治めたり。その母は名をイエケリアと云いて、イエルサレムの出身なりき。三 彼は萬その父アマシアの爲したる所に循いて、主の御前に嘉せらるる事を行えり。四 然れども高き處は毀たざりき。民はその高き處に於いて、犠牲を献げ、香を焚き居たるなり。五 然るに主は王を撃ちて、その死する日まで癩病者たらしめ給いたれば、¹⁾ 彼は離れ家に別れ住みぬ。よりて王の子ヨアタン宮殿を管理り、國の民を審判きたり。六 六さてアザリアの殘餘の事、及びその爲したる一切は、是、ユダの王の歴代史の書に録されたるに非ずや。七 やがてアザリア、その父祖と共に眠りしかば、人々之をその祖先と共に、ダヴィドの市に葬りたり。²⁾ 次いでその子ヨアタン、彼に代りて王となれり。八 ユダ王アザリアの第三十八年にイエロボアムの子ザカリア、イスラエルの王となり、サマリアにあること

第十五章

1) 司祭の職を

横取りすること

とを敢えてし

た王を罰する

ため。代下二

六・一六―二

○参照。

2) アザリアは

癩病であつた

ので、王の墓

所でなく、列

王の墓の近く

の或る地所に

葬られた(代

下二六・二三)

九 六箇月なりき。彼はその父祖の爲したる如く、主の御前に悪しき事を爲し、

一〇 ナバトの子にしてイスラエルに罪を犯さしめたる、イエロボアムの罪を離れ

ざりき。時にヤベスの子セルム、彼に對して謀叛を企て、公然之を討ちて

二 殺し、彼に代りて王となれり。二さて、ザカリアの殘餘の事は、是、イスラ

三 エルの王の歴代史の書に録されたるに非ずや。主がイエフに告げ給ひし御

言は次の如し、曰く、「汝の子等は四代までイスラエルの王位にあらん。」

三 と。果して然なりにき。三 ヤベスの子セルムは、ユダ王アザリアの第三十九

四 年に王となり、サマリアに於いて一箇月の間治めたり。時にガデイの子マ

ナヘム、テルサよりサマリアに上り來り、四 サマリアに於いてヤベスの子セ

一五 ルムを討ち、之を殺し、彼に代りて王となれり。一五 さてセルムの殘餘の事、

一六 及びその不意打を圖りたる陰謀は、是、イスラエルの王の歴代史の書に録さ

れたるに非ずや。一六 それよりマナヘムは、タブサとその中にあるすべての者

及びそのテルサとの境界を撃てり。そは彼等、彼の爲に門を開くことを肯ぜ

3) 本一〇

・三〇。

4) 自分の

友たる王

をセルム

が殺した

という知

らせを聞

き、全兵

力を擧げ

てサマリ

アに向か

つて來た

のである

ざりければなり。かくて彼はその懐胎せる女を悉く殺し、之を割きたり。

一七 ユダ王アザリアの第三十九年に、ガデイの子マナヘム、イスラエルの王と

なりてサマリアにあること十年に及べり。一八 彼は主の御前に悪しき事を爲し

て、終生イスラエルに罪を犯さしめたる、ナバトの子イエロボアムの罪を離

れざりき。一九 アツシリア人の王フル、その地に入り來りたるが、⁵⁾ マナヘ

ム、フルに銀一千タレントを與え、以て己を助けしめ、己が王位を堅うせん

とせり。二〇 即ちマナヘムは、その銀をイスラエルのすべての有力者及び富者

に課し、以てその各人をして、銀五十シクル宛、アツシリア人の王に與えし

めたり。茲に於いてアツシリア人の王は、歸り行きてその地に留まらざりき。

二一 さて、マナヘムの殘餘の事、及びその爲したる一切は、是、イスラエルの

王の歴代史の書に録されたるに非ずや。二二 やがてマナヘム、その父祖と共に

眠り、その子ファケヤ彼に代りて王となれり。二三 ユダ王アザリアの第五十年

に、マナヘムの子ファケヤ、イスラエルの王となりて、サマリアにあること

5) イスラ

エルの歴

史に、ア

ツシリア

人が出て

くるのは

ここが始

めて。フ

ルはテグ

ラト・フ

アラサル

のバビロ

ン名。二

九節参照

二四 二年に及べり。二四 彼は主の御前に悪しき事を爲して、ナバトの子にしてイスラエルに罪を犯さしめたる、イエロボアムの罪を離れざりき。二五 時にロメリアの子なるその將ファケー、彼に對して謀叛を企て、ガラード人の子等五十人⁶⁾と共に、王の家の塔⁷⁾に於いて、アルゴブとアリエとの傍にて彼を討ちて之を殺し、彼に代りて王となれり。二六 さて、ファケヤの殘餘の事、及びその爲したる一切は、是、イスラエルの王の歴代史の書に録⁸⁾されたるに非ずや。二七 ユダ王アザリアの第五十二年にロメリアの子ファケー王となり、サマリアにありてイスラエルを治むること二十年に及べり。二八 彼は主の御前に悪しき事を爲し、ナバトの子にして、イスラエルに罪を犯さしめたる、イエロボアムの罪を離れざりき。二九 イスラエル王ファケーの代に、アツシリア王テグラト・ファラサル⁸⁾來りてアイオン、マーカ

6) この五十人はファケー配下の親衛隊員中の人々であつたらう。—7) 城。
8) テグラト・ファラサルは西紀前七四五年—七二七年政を執つた。多分マナヘム援助の条件であつた納貢が行われなかつたためであるらう、テグラト・ファラサルは七三四年新たに來つてファケーに勝ち、アツシリアへの最初の捕虜として、イスラエル人を引いて行つた。—なほアツシリアは、原文アツスル。

家のアベル、ヤノエ、ケデス、アソル、ガラード、ガリレア、及びナフタ
 三〇 リの全地を取り、その人々をアツシリア⁹⁾に移せり。三〇時にエラの子オゼ
 一、ロメリアの子ファケーに對して謀叛を企て不意打を圖り、之を討ちて
 三二 殺し、彼に代りてオジアの子ヨアタムの第二十年に、王となれり。三二さ
 て、ファケーの殘餘の事、及びその爲したる一切は、是、イスラエルの王
 三三 の歴代史の書に録されたるに非ずや。三三イスラエル王、ロメリアの子ファ
 ケーの第二年に、ユダ王オジアの子ヨアタム、王となれり。10) 三三彼は統治
 を始めし時二十五歳なりしが、イエルサレムに於いて十六年の間治めた
 三四 り。その母は名をイエルサと云いて、サドクの娘なりき。11) 三四彼は主の御
 三五 前に嘉せらるる事を爲し、萬その父オジアの爲したる如く行えり。三五然れ
 ども高き處は取除かざりき。民なおその高き處に於いて犠牲を獻げ、香を
 三六 焚けり。彼は主の家の最も高き門を建てたり。12) 三六さて、ヨアタムの殘餘
 の事、及びその爲したる一切は、是、ユダの王の歴代史の書に録されたる

9) ヴルガタ原文ではアツシリア人。
 10) 代下二七・一。
 一。一1) 代下二七・一。
 12) これは王宮の横から聖殿の前庭に至る上手の門。これらるの建築物は、イスラエル王ヨアスが行つた破壊(本一四・一三)に關係がある。

三七 非^{あら}ずや。三^{三七}その頃^{ころ}主^{しゆ}はシリア王^{おう}ラシン¹³⁾と、ロメリアの子^こファケ
三八 一^一とを、ユダに遣^{つか}し給^{たま}えり。14) 三^{三八}やがてヨアタム、その父^ふ祖^そと共^{とも}に
眠^ねり、彼^{かれ}等^らと共^{とも}にその父^{ちち}ダヴィドの市^{まち}に葬^{ほうむ}られたり。次^ついでその子^こ
アカズ、彼^{かれ}に代^{かわ}りて王^{おう}となれり。

13) このシリア新王朝の始祖は、ユダ王國を敵としてイスラエル王と同盟した。
14) 賽七・一。

第十六章

アカズの悪政—シリア及びイスラエルの王等彼と戦う—アカズ、アツシリア人の王に援助を求む—アカズ、ダマスコの祭壇を模して祭壇を作らしむ。

一 一^一ロメリアの子^こファケ一の第^{だい}十七年^{ねん}に、ユダ王^{おう}ヨアタムの子^こアカズ
二 王^{おう}となれり。二^二アカズは統^{とう}治^ちを始^はめし時^{とき}、二十^{じゅう}歳^{さい}なりしが、イエ
三 王^{おう}となれり。二^二アカズは統^{とう}治^ちを始^はめし時^{とき}、二十^{じゅう}歳^{さい}なりしが、イエ
サレムに於^おいて十六^{じゅう}年^{ねん}の間^{あいだ}治^ちめたり。彼^{かれ}はその父^{ちち}ダヴィドの如^{ごと}くに
は、その天^{てん}主^{しゆ}なる主^{しゆ}の御^{おん}眼^め前^{まへ}に嘉^よせらるる事^{こと}を行^{おこな}わざりき。1) 三^三却^{かえ}つ
て彼^{かれ}はイスラエルの諸^{しよ}王^{おう}の道^{みち}を歩^{あゆ}みぬ。2) 剩^{あまつさ}へ、主^{しゆ}がイスラエルの
裔^こ等^らの前^{まへ}より打^{うち}散^ちらし給^{たま}える異^{こと}邦^{くに}人^{びと}の偶^{ぐう}像^{ざう}に從^{したが}いて己^{おの}が子^こをさ^さえ獻^さす

第十六章 1) 代下二
八・一。—2) 犢禮拜、
また恐らくはバール
禮拜をも行つた。

四

げて、火の中を通らしめたり。³⁾ 彼はまた高き處や丘の

上、すべての青葉繁れる樹の下に於いて、犠牲を献げ、香

を焚けり。⁵⁾ その頃⁴⁾ シリア王ラシン、及びロメリアの子

なるイスラエル王ファケ！、イエルサレムに攻め上りて、

アカズを圍みたれども、之に勝つこと能わざりき。⁶⁾ この

時に當り、シリア王ラシンは、アイラ⁵⁾をシリアに取り戻

し、ユダの人々をアイラより追ひ拂いたれば、エドム人ア

イラに來りて其處に住み、以て今日に至れり。⁷⁾ さて、ア

カズ、アツシリア人の王テグラト・ファラサルに使者を遣

りて云わしめけるは、「我は汝の僕にして汝の子なり。上

り來りて、シリア王の手とイスラエル王の手とより我を救

い給え、彼等共に起ちて我を攻めつつあり。」と。⁸⁾ ハしか

して主の家と王の寶庫とにあるほどの金銀を集めて、アツ

3) すなわちモロクの人身御供と

して焼き殺す。一般に國難の際、

神々の心を宥めるため貴人の子

等を献げることとは、屢々昔の異

教國で行われた。本三・二七參

照。モイゼの律法は、聖なる御

民にかかる恐ろしい犠祭を行わ

せぬよう厳しく戒めている。

4) この「その頃」と、アカズの

不敬行爲との間には、明白な相

互關係がある。――5) この港は前

にアザリアが奪い取つていたが

今度ラシンがそれを取り戻して

ユダ王國の東國との通商に恐る

べき打撃を與えた。――6) 本一五

・二九。

――8) 本一五

九 シリア人の王に之を禮物として贈れり。九よりて彼その意に従いぬ、
 即ちアツシリア人の王ダマスコに上り行きて之を荒し、その住民を
 一〇 キレネ⁷⁾に移し、またラシンを殺したるなり。一〇茲に於いてアカズ
 王はアツシリア人の王テグラト・ファラサルに逢いにダマスコに行
 きしが、⁸⁾ダマスコの祭壇を見るに及びて、その模型とその構造全
 二 體に對する寫生圖とを、司祭ウリアの許に送りぬ。二されば司祭ウ
 リアは、すべてアカズ王がダマスコより命じ來れる所に循いて、一
 の祭壇を作れり。司祭ウリアはかくの如くなしてアカズ王のダマス
 三 コより來るを待てり。二やがて王ダマスコより來るや、祭壇を見て
 之に敬禮し、上りて献ぐるに燔祭と己が爲の素祭と、^{一三}灌祭とを以
 一四 てし、その祭壇の上にて献げたる和祭の血を灌ぎたり。一四また主の
 御前みまへにある青銅せいどうの祭壇を、聖殿せいでんの正面より、祭壇の處より、主の聖
 一五 殿でんの處より移して、かの祭壇の横に、北の方に置きたり。⁹⁾一五しか

7) キレネはアラメア人の原始故郷らしくバビロニアとエラムとの間にあつた。
 8) アカズはアツシリアの王に謝意を表すると共に、これをイエルサレムに近づけまいと思つた。
 9) これは以前南の方に立つていたが、その横に築かれた新祭壇は、中央に位置を占めているので、一層重要かつ神聖になつた。

一六 壇は、わが意のままに整うべし。」と。一六よりて司祭ウリアは、
 一七 すべてアカズ王が命じたる如くに爲しぬ。一七またアカズ王は彫刻
 一八 ある台とその上なる洗盤とを取去り、更に海を、之を支うる青銅
 一八 の牛より下して、石を鋪きたる床の上に置けり。一八また聖殿内に
 一九 建てたる安息日のムサク¹⁰⁾ならびに王の外の入口をも、アツシリ
 一九 ア人の王の爲に、改造して主の聖殿の内に入れたり。一九さて、ア
 二〇 カズの爲したる残余の事は、是、ユダの王の歴代史の書に録され
 二〇 たるに非ずや。¹¹⁾ 二〇やがてアカズはその父祖と共に眠り、彼等と
 共にダヴィドの市に葬られたり。次いでその子エゼキア、彼に代

10) 安息日の天蓋付の座 (ムサクと稱する) は王のためのもので、第一前庭内にあり、王宮から特別な通路があつた。— 11) 國が政治的にも宗教的にも、没落に近づいたのは、この弱い、自分より勢力の強い者の前には平身低頭するが、臣民には尊大に振舞う君主の責任である。ユダは罰として己の成行に世界的強國アツシリアの干渉をまますすひどく受けるばかりである。

りて王となれり。

第十七章

オゼーの治世—イスラエル人捕われの身となる—他の住民アツシリア王によりサマリアに遣られ、宗教の混淆を来たす。

一 ユダ王アカズの第十二年に、¹⁾ エラの子オゼー王

となり、サマリアにありてイスラエルを治むること

九年に及べり。²⁾ 彼は主の御前に悪を行いが、

その前にありしイスラエルの諸王の如くには非ざり

き。²⁾ ³⁾ アツシリア人の王、サルマナサル、³⁾ 之を攻

めに上り來り、終にオゼー！その臣下となりて彼に貢

を納めぬ。⁴⁾ 然るにアツシリア人の王は、オゼー！が

毎年例として爲したる如く、貢をアツシリア人の王

に納めざらん爲に、叛かんと圖りてエジプト王スア

第十七章 ¹⁾ オゼーは既にアカズの第

四年に王位を僭し、ファケーを殺して

いた。それで彼は八年間諸黨と闘わね

ばならなかつた。²⁾ 彼は犢禮拜を防

ぐことは一向しなかつたが、少くとも

偶像禮拜には反對したらしい。³⁾ テ

グラト・ファラサルの子サルマナサル

四世。七二七年即位。オゼーがエジプ

ト王スアに誘われて、納貢を拒むや、

七二五年サルマナサル再來してサマリ

アを三年の間包圍した。⁴⁾ 本一八・

九。土一・二。

五 五 即ち彼全國を經廻り、サマリアに上りて三年の間之を圍みたりしに
 六 オゼーの第九年に至りて、⁶⁾ アツシリア人の王、サマリアを取り、イス
 ラエルをアツシリアに移して、之をメデアの市々なるハラ、及びゴザン河
 畔のハボルに置けり。⁷⁾ 蓋は、イスラエルの裔等が、己をエジプトの地よ
 七 り、エジプト王ファラオの手より導き出し給える、主その天主に罪を犯し
 八 て、異なる神々を崇むるに至りたればなり。 彼等は、主がイスラエルの裔
 九 等と、イスラエルの王等との眼前にて滅ぼし盡し給いし異邦人等の慣習に
 循いて歩みたり。其は同様に爲したればなり。 九 しかしてイスラエルの裔
 等は正しからざる事をもて、主その天主に背き奉れり、即ちそのすべての
 一〇 邑々に、己が爲に高き處を築き、物見櫓より堅固ある市にまで及ぼせり。
 一〇 また彼等は己が爲に、すべての高き丘の上と、すべての繁れる木の下と
 二 に、神像を立て、並木を設け、二其處に於いて、主が彼等の面前より取り

5) サマリアを
 征服した後。
 6) これはエゼ
 キア王の第六
 年、キリスト
 降生前七二二
 年のことであ
 った。 1) ハ
 ラ及びゴザン
 は、カルケミ
 シユの邊でエ
 ウフラト河に
 注ぐハボル川
 流域の地方。
 7) 本一八・一
 一。

二 去り給いし異邦人の風習に循い、祭壇の上にて香を焚き、いと悪しき事を爲して主を怒らせ奉り、三主がそれに就きて

一三 をかかると事は爲すべからずと彼等に命じ給える、不淨の者を崇めたり。三時に主すべての預言者と洞見者との手により、イスラエルとユダとに證して曰えり、「汝等の悪しき道を離れて立歸り、我が汝等の父祖に命じたるすべての律法に循い、且わが僕なる預言者等の手によりて汝等に傳えし如く、わが教訓と典憲とを守れ。」と。8) 一四されど彼等は

一四 聽かずして、主その天主に従うを欲せざりしその父祖の頸の如くに己が頸を固うせり。一五しかして彼等はその法則とその己が父祖と結び給える契約と、その己に證し給える證言とを棄て、空しき物に従いて空しき行爲をなし、己が周

一五 圍にある異邦人等に倣いたり、しかも主は之に就きて、そ

8) 耶二五・五。―北の王國に預言者として現れたのは、アヒア(王上一四・二)、イエフ(王上一六・一)、エリア、ミケア(王上二二・八)、エリゼオ、ヨナ(二四・二五)、オデド(代下二八・九)、オゼー、アモス。南の王國にはセメヤ(代下一一・二)、アツド(代下一二・一五)、アザリア、代下一五・一)、イエフ(代下一九・二)、イエハジエル(代下二〇・一四)、エリエゼル(代下二〇・三七)、ザカリヤ(代下二四・二〇)、ヨエル、ミケア、イザヤ、イエレミア。

一六 の爲す如くには爲すべからずと命じおき給いしなり。一六かく彼等は主その天主の誠命を悉く捨て、己が爲に二箇の鑄物の牛や並木を作り、天の全衆星を拜み
 一七 バールに仕え、一七己が息子娘を火によりて献げ、占卜や吉凶判断を行い、主の御前に悪を爲すことに身を委ねて、その御怒りを招けり。一八茲に於いて主はイ
 一八 スラエルに對し太く怒り、その御眼前より之を取除き給いしかば、ただユダ族の外には残らざりき。一九然るにそのユダさえも、主その天主の御規定を守ら
 二〇 ずして、イスラエルの犯したる過誤を踏みて歩みぬ。二〇されば主はイスラエルの後胤を悉く打棄て、之を惱まし、之を掠奪者の手に付し、遂に之をその御面
 二一 前より棄て給えり。二二そは既に、イスラエルがダヴィドの家より分裂して、己が爲にナバトの子イエロボアムを王に擁立てたる時よりの事にして、實にイエ
 二三 ロボアムはイスラエルを主より引離し、之に大いなる罪を犯さしめたり。10) かくイスラエルの裔等、イエロボアムの犯したる諸々の罪に歩み、之を離れ
 二三 ざりしかば、二三終に主イスラエルをその御面前より除き去り給えり。即ちその

のすな
 わちユ
 ダ族が
 ベンヤ
 ミン族
 及びレ
 ヴイ人
 と共に
 形成し
 ている
 ユダ王
 國。
 10) 王上
 一二・
 一九。

二四 僕なるすべての預言者の手によりて語り給いし如し。かくてイスラエルその國よりアッシリアに移されて、今日に及びり。11) 二四 さてアッシリア人の王は、バビロン、クタ、アヴァ、

二五 エマト、及びセファルヴァイムより人々を連れ來りて、イスラエルの裔等の代りに12) 之をサマリアの市々に置きたれば、彼等サマリアを領してその邑々に住みぬ。13) 然るに彼等其

二六 處に住むことを始めし時、主を畏れざりしかば、主、彼等に對して獅子を遣し給い、獅子彼等を殺せり。二六 時にアッシリ

二七 ア人の王に告ぐる者ありて曰く、「汝が移して以てサマリアの市々に住わしめ給える國々の民は、その地の天主の律法を知らず。故に主彼等に對して獅子を遣し給いしに、視よ、獅子彼等を殺せり。是、彼等がその地の天主の典憲を知らざるによるなり。」と。14) 二七 茲に於いてアッシリア人の王、命じて

11) 列王記編纂時代には、まだイスラエル人が捕囚の身であつた。—耶二五・九。

12) イスラエル王國はその分立二百五十年間に、天主の御憐憫を垂れ給うのをすべて感ぜぬ如き態度を示し主から離れた。故に選民たる價值なき者となつた。

13) 彼らはイスラエル人の残りと宗教上政治上では一致せぬまままで、共に雜居民族を形成した。—14) 天主を棄てた者共に對する野獸襲撃の豫言。利二六・二二二参照。

二八 云いけるは、「汝等が彼處より捕虜として曳き來りし司祭等の一人を、彼處に連れ行け。彼は行きて彼等と共に住み、その地の天主の律法を彼等に教うべし。」と。二八よりてサマリアより捕虜として曳き來られし司祭等の一人、行きてベテルに住み、如何にして主を崇むべきかを彼等に教えたり。15) 二九なおいずれの國民もそれくに己が神を造りて、之をサマリア人の作りたる高き處の神殿に安置したり。いづれの國民もその住える邑々に於いてかく爲したり。三〇即ちバビロンの人々はソコトベノト16) を作り、クタの人々はネルゲル17) を作り、エマトの人々はアシマを作り、三一ヘヴの人々はネバハズとタルタクとを作れり。またセファルヴァイムより來れる人々は、セファルヴァイムの神々なるアドラメレクとアナメレクと18) に献ぐとて、己が子等を火に焼けり。三二然りながら彼等は主を崇めたりき。しかして己

15) この司祭は犢に事えるイスラエル人司祭で、従つてベテルに居住した。彼のおかげでこの地も全く多神教ばかりではなくなつた。—16) ヘブレオ語スツコイト・ベノト。これは恐らくバビロンの女神ジルバーニトの名をへブレオ字に書き移す時誤つたのだらう。—17) アツシリアの宮殿の入口を衛る巨大な人頭獅子身の形で表された神。—18) モロク禮拜に屬する二偶像

三三 三三三 三三四 三三五 三三六 三三七 三三八 三三九 三四〇

が爲に賤民を¹⁹⁾ 高き處の司祭となし、之を高き處の神殿に置きたり。²⁰⁾ かく
 彼等は主を崇むると共に、その移されてサマリアに來れる異邦人の習俗に循い
 その神々にも亦仕えたり。^{三四} 彼等は今日に至るまで舊き習俗に循いおりて、主
 を畏れず、主がイスラエルと別名を與え給いしヤコブの裔等に命じ給える、そ
 の典憲をも、規定をも、律法をも、誠命をも守らざるなり。²¹⁾ ^{三五} 主曾て彼等と
 契約を結び、之に命じて曰わく、「汝等他の神々を畏るべからず、また之を拜
 し、之を崇め、之に犠牲を獻ぐべからず。^{三六} ただ主、汝等の天主、即ち大いな
 る御力を以て、御腕を差伸べ、汝等をエジプトの地より導き出し給える者は、
 汝等之を畏れ、之を拜し、之に犠牲を獻ぐべし。^{三七} またその汝等の爲に録し給
 える典憲と規定と律法と誠命とをも、汝等いつの日にも守り行え。他の神々を
 畏るべからず。^{三八} しかして主の汝等と結び給いし契約を、汝等忘るべからず、
 また他の神々を崇むべからず。^{三九} ただ主、汝等の天主を畏れよ、さらば彼は汝
 等をそのすべての敵の手より救い給わん。」と。^{四〇} されど彼等は聽かずして、

19) 彼ら
 の中か
 ら任意
 の人々
 を。
 20) 王上
 一二・
 三一。
 21) 創三
 二・二
 八。

四一
その舊の習俗に循い、事を爲したりき。四二是等の國人はかく主を畏れ奉りぬ。然りながら己が偶像にも亦仕えたり。22) しかしてその子や孫も亦その父祖の爲したる如く、今日に至るまで然ならずなり。

22) 彼らは成程主を崇めてはいたが、律法に命ぜられていた通り(出二〇・二以下、申五・六以下参照)、ただ主のみではなかつた。それでイエズスの時代まで、ユデア人からは天主の眞の信者でないと見られ輕蔑されていた。

第十八章

エゼキアの治世―彼偶像禮拜を廢して繁榮す―センナケリブ来りて彼を攻む―ラブサケス民に叛逆を使喚し、また主を冒瀆す。

一 イスラエル王、エラの子オゼーの第三年に、ユダ王アカズの子エゼキア王となれり。1) 彼は統治を始めし時、二十五歳なりしが、イエルサレムに於いて二十九年の間治めたり。その母は名をアビと云いて、ザカリアの娘なりき。三彼

第十八章 1) 代下二八・二七。二九・一。

四 は、萬その父ダヴィドの爲したる如く、主の御前に善き事を爲せり。²⁾ 彼は高き處を崩し、像を毀ち、並木を伐り倒し、モイゼの作りたる青銅の蛇を碎きぬ。實にその時までイスラエルの裔等は、之に香を焚き居たるなり。しかしてその名をノヘスタンと稱びたりき。³⁾

五 彼は主、イスラエルの天主に依頼めり、實に彼の如き者、彼の後なるユダの諸王の中にも、彼の前にありし者の中にも、又とあらざるほどなりき。⁴⁾ 彼は主に固く附きて、その道を離れず、主がモイゼに命じ給え

七 るその誠命を實行せり。是に由りて主彼と共に在したれば、⁴⁾ 彼は萬事に賢く振舞いたり。彼はアツシリア人の王に叛きて、之に事えざりき。彼はファイリス

八 ト人を討ちてガザ及び彼等のすべての境界にまで至り

2) 集四九・五にもエゼキアは賞讃してある。イスラエル王國は終末に近づき、ユダ王國はアカズに滅ぼされようとする頃、ダヴィドの模範に倣う一人の王が即位する。—3) 利二一・九。—ノヘスタンとは青銅の意。一時青銅の蛇を崇めたことは、それがモイゼの時代から尊ばれており、且蛇禮拜が例えばガゼルなど、ユダ近傍を本據としていただけに、容易に解せられるであろう。—4) この事が特にあらわれたのは、アカズの代にファイリス人がユダの一部を占領したので、エゼキアがそれを取戻すために戦争した時と、アツシリアの支配を拒否した時。

九 物見櫓ものみやぐらより固かためある市まちにまで達たつせり。九 エゼキア王おうの第四年だいねん、即すなわちイスラエル王おうエラの子こオゼーの第七年だいねんに、アツシリア人びとの王おうサルマナサ
 一〇 ル、サマリアに上のぼり來きたり、之これを攻せめて、⁵⁾終つひに取とれり。蓋そは三年ねんの
 後のちにして、エゼキアの第六年だいにん、即すなわちイスラエル王おうオゼーの第九年だいにんに、
 二 サマリア取とられたるなり。ニアツシリア人びとの王おうはイスラエルをアツシ
 リアに移うつし、之これをメデアの市まち々くなるハラ及びコザン河かはん畔へんのハボルに置お
 三 けり。⁶⁾ 三 其そは彼等かれら、主しゆその天主てんしゆの御聲みこゑに聽きかずして、その契約けいやくを破やぶ
 りたればなり。凡すべて主しゆの僕しもべモイゼが命めいじたる所ところを、彼等かれらは聽きかず、且かつ
 一三 行おこなわざりき。⁷⁾ 三 エゼキア王おうの第十四年だいにんに、アツシリア人びとの王おうセンナケ
 リブ、上のぼり來きたり、ユダの諸所しよしよの堅備かためある市まち々くに至いたりて之これを取とれり。⁷⁾
 一四 その時ときユダ王おうエゼキア、ラキスに在あるアツシリア人びとの王おうに使者しやつかわを遣つか
 して云いわしめけるは、「我われ、過あやまりて。わが許もとより退しりぞき給たまえ。さらば凡おほ
 一四 一 汝おんみの我われに負おわせ給たまう事ことは、我われ之これを爲なさん。」と。よりてアツシリア

⁵⁾ エゼキアの第六年に當るこの事件は、同王の第十四年に當るイエルサレム救助と對照して今一度引用される。—本一七・六。土一・二。—⁶⁾ 本一七・六。—⁷⁾ このユダ王國侵入はアツシリアの記念碑に、同王の第三次戰役として記してある。—代下三二・一。集四八・二〇。賽三六・一。

一五 人の王は、ユダ王エゼキアに銀三百タレント、及び金三十タレントを課したり。一五 エゼキア乃ち主の家と王の寶庫とにあるほどの銀を悉く與えぬ。

一六 その時エゼキアは主の聖殿の扉と、己がそれに着けたりし黄金の板とを剝がして、之をアッシリア人の王に與えたり。一七 アッシリア人の王は、タルタン、ラブサリス、及びラブサケス⁸⁾に有力なる軍隊を附けて、ラキス

よりイエルサレムなるエゼキアの許に遣したれば、彼等は上りてイエルサレムに至り、漂白野の道の邊にある上の池の水道の邊に立ちて、⁹⁾ 一八 王を呼べり。茲に於いてヘルキアの子なる宮相エリアキム、書記官ソブナ、及びアサフの子なる史官ヨアへ、出でて彼等の許に至りぬ。一九 ラブサケス

之に云いけるは、「エゼキアに告げよ、¹⁰⁾ アッシリア人の王なる大王はかく曰う、¹¹⁾ 汝が恃みとせるこの信賴は何ぞや。二〇 恐らくは汝、戦争の準備を爲さんと圖れるならん。汝、誰を恃みてか叛くことを敢てするぞ。二一 汝

は折れたる葦の杖、エジプトに縋るや、人もし之に倚らば、そは斷れてそ

は折れたる葦の杖、エジプトに縋るや、人もし之に倚らば、そは斷れてそ

は折れたる葦の杖、エジプトに縋るや、人もし之に倚らば、そは斷れてそ

8) 三つの職名

タルタンは元

帥。ラブサリ

スは宮廷長。

ラブサケスは

獻酌侍從長。

9) この水道は

既にアカズの

代に出來てい

た。その始ま

る所はギホン

の池。

<p>三 の手に入り、¹⁰⁾ 之を刺し貫かん。エジプトの王ファラオは、彼を 恃みとするすべての者に對して然るなり。三また汝等我に、 「我等は主、我等の天主を恃む」と云わば、之、エゼキアがその高き 處と祭壇とを取除き、¹¹⁾ ユダとイスラエルとに、 「汝等イエルサ レムに於いて、この祭壇の前にて禮拜すべし」と命じたる、かの 者に非ずや。三されば今アツシリア人の王なるわが主君の方に 附け、さらば我汝等に馬二千頭を與えて、汝等が之に騎る者を募 り得るやを見ん。三汝等いかでわが主君の最も小さき諸臣中の一 人の長にだに抵るを得んや。汝、戦車及び騎兵ゆえに、エジプト を恃みとするか。三我がこの處を滅ぼしに攻上りたるも、豈主の 御旨によらざらんや。主、我に曰えり、 「この地に攻上りて之を 滅ぼせ」と。¹²⁾ 三然るにヘルキアの子エリアキム、ソブナ、及 びヨアー、ラブサケスに云いけるは、 「願わくは、汝の僕なる我</p>	<p>二五</p>	<p>二四</p>	<p>二三</p>	<p>二二</p>	<p>二一</p>	<p>二〇</p>
---	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------

10) 折れた葦は、蘆荻に富むナイルの地に好適なかたどり。これを完全なものと考えてよりかかれば、その折れた尖端で手を傷ける。
11) ラブサケスはこれによつて、まだエゼキアに付いている民を激昂させようとする。
12) 多分ユダを懲らすためにアツシリア人が招かれるという、ユデア人の豫言が彼の耳に入っていたのである。

等に、シリア語を以て語り給わんことを。蓋は我等この言葉を解すればなり。石垣の上に居る民間くに由り、我等にユデア語を以て語り給うなかれ。」と。

二七 ラブサケス彼等に答えけるは、「わが主君が是等の言を告げしめんとて我を遣し給えるは、ただ汝の主君と汝との爲のみならんや、寧ろ石垣の上に坐せる人々の爲にして、彼等をして汝等と共に、その糞を喰い、その尿を飲ましめん

二八 とてには非ずや。」と。13) 二八 かくてラブサケス、立ちて大聲に、ユデア語を以て叫びて云いけるは、「アツシリア人の王なる、大王の御言を聽け、二九 王はかく

三〇 云い給う、汝等、エゼキアに唆かさるることなかれ。蓋し彼は汝等をわが手より救い出すこと能わじ。三〇 また彼、主必ず我等を救い給わん。この市はア

三一 ツシリア人の王の手に渡らざるべし。と云うとも、之によりて主を恃むなかれ。」三二 エゼキアに聽くなかれ。夫れ、アツシリア人の王はかく云い給う、

「我と共に、汝等に益ある事を爲し、出でて、わが許に來れ。さらば汝等各人己が葡萄畑、己が無花果の樹より食するを得、汝等の井戸水を飲むを得べし、

13) アツシリア人がイエルサレム攻圍に來るなら起る筈の事を指摘。

三三

三三 終に我來りて汝等の國に似たる國、穰り豊かにして葡萄酒の産
多き國、パンと葡萄酒との國、橄欖と油と蜜との國に汝等に移さ
ん。されば汝等生くるを得て、死することなかるべし。14) // 主我
等を救い給わん」と云いて、汝等を欺くエゼキアに聽くなかれ。

三三

三三 諸國の神々の中、その國をアツシリア人の王の手より救いたる
者ありや。三四 エマトの神及びアルファドの神は何處にかある、セ

三四

フアルヴァイムの神、アナの神、及びアヴァの神は何處にかある。

三五

彼等はわが手よりサムリアを救いたりや。15) 三五 諸國のすべての神
々の中、その國をわが手より救い出したる者は誰ぞ。されば主豈

三六

わが手よりエルサレムを救うを得んや。」と。三六 されど民は黙
して一言だも彼に答えざりき。蓋は彼等、之に答うるなかれとの

三七

命令を王より受け居たればなり。三七 かくてヘルキアの子なる宮相
エリアキム、書記官ソブナ、及びアサフの子なる史官ヨアへ、そ

14) エデアの人々は降服しても捕虜として引き行かれる、というのである。但し使者は彼らに、新天地が甚だ豊穰である旨約束する。當時でも今日の如く、果されそうにもない、又果すつもりもない、空しい約束をしたのである。—15) アツシリア人はこの町々から、移民をサムリアへ連れて來た。—本一七・二四。一九・一三。賽三七・一三。

の衣服を裂きて¹⁶⁾エゼキアの許に至り、ラ
ブサケスの言を彼に告げたり。

第十九章

預言者イザヤ、天主の御祐助をエゼキアに保證す—天主エゼキアに
イエルサレムの保護を約し給う—一天使アツシリア軍を滅ぼす。

16) エゼキアの使者達が衣服を裂いたのは、主なる
天主を空しい神々と同等に視た冒瀆に對して。

一 エゼキア王之を聞くや、己が衣服を裂き

身に粗麻布を纏い、主の家に入りぬ。¹⁾ニし

かして彼、粗麻布を着たる宮相エリアキ

ムと、書記官ソブナと、司祭等の中の長老

とを、アモスの子なる預言者イザヤの許に

遣したり。²⁾ 彼等云いけるは、「エゼキア

はかく云う、今日³⁾は患難の日、懲戒の日

冒瀆の日なり。子生れ出でんとして、産む

第十九章 1) 賽三七・一。 2) 司祭達はただその

素姓によつて天主の召使たるに過ぎないが、預言
者達は親しく天主から選ばれ、主の靈に満たされ
た人々である。

者に力なし。3) 四 主汝の天主、或はラブサケスの言を悉く聴き給うことともあらんか。彼はその主君なるアツシリア人の王が活ける天主を誘り、言もて辱しめんとて遣したる者にして、主汝の天主はそれを聞き給えり。されば汝、なお存する残れる者4) の爲に祈禱をなし給え。」と。

五 エゼキア王の臣僕等、かくの如くイザヤの許に至れり。六 時にイザヤ彼等に云いけるは、「汝等の主君にかく云うべし、主はかく云い給う、汝が聞きし、アツシリア人の王の臣僕等が我を冒瀆したる言5) を恐るるなかれ。七 視よ、我は彼に一の靈を遣さん。6) 彼はその告ぐるを聞きて己が國に歸るべし。更に我は彼をその國に於いて劍に殞れしめん。」と。八 かくてラブサケス歸りて、アツシリア人の王がロブナを攻め居るに會えり 彼はそのラキスを離れしを聞き居たりしなり。九 時に彼、エチオピアの王タラカ8) に就きて、「視よ、彼汝と戦わんとて出で來れり。」と人の云うを聞き、行きて之9) に當る時、

3) この語はこの上ない患難窮狀を云いあらわすための諺的な云い方。
 4) 殊にイエルサレムの如く、まだアツシリア人の支配を受けずにいるもの。—5) 原文 facie sermonum 「言に面して」。
 6) 今の如き天主冒瀆を、最早敢てしないようにさせる意氣銷沈の靈。

一〇 エゼキアの許に使者等を遣すとして云いけるは、^{一〇}「汝等、ユダの王エゼキアにかく云うべし。『汝の天主を恃みて、之に欺かるるなかれ。』イエルサレムはアッシリア人の王の手に渡らざるべし。と云うなかれ。二視よ、汝はアッシリア人の王等が諸國に對して爲したる所、即ち如何に之を荒したるかを聞けり。さらば汝獨り救わるるを得んや。三諸國の神々が、わが父祖の滅ぼしたるもの、即ちゴザン、ハラシ、レセフ、及びテラサルに在りしエデンの裔等の一だに救いしことありや。四エマトの王、アルファドの王、セフアルヴァイム市の王、アナ、及びアヴァの王、何處にかある。五」と。^{一四}エゼキア乃ち使者等の手より書簡を受けて之を讀むや、主の家に上り行きて之を主の御前に擴げ、^{一五}その御眼前に祈りて云いけるは、「智天使¹⁰⁾の上に坐し給う主、イスラエルの天主よ、汝獨り地の諸々の王の天主にて在す、汝は天地を創造り給えり。^{一六}御耳を傾けて聽しめし給え。主よ、御眼を開きて癒し給え、センナケリブのすべての言を聽しめし給え、

7) 本一八・一四。—8) タラカはエジプト王スアの後繼者。それがこゝでエチオピアの王と云われてゐるのはエチオピア王朝出の三番目の王であつたから。—9) センナケリブがタラカに抵る時。—10) 契約の櫃の兩智天使。

一七 彼は我等の前に活ける天主を誇らんとて人を遣したり。一七 實に主よ、アツシリ
 一八 ア人の王等は、諸々の國民とその國とを滅ぼし、一八 之が神々を火中に投じたり
 蓋し是等は神に非ずして、木石より人手にて作りしものなれば、彼等之を滅ぼ
 したるなり。一九 されば今、主、我等の天主よ、我等を彼の手より救い給え、こ
 一九 地上のすべての王國が、汝獨り主たる天主に在すことを知らんためなり。」
 二〇 と。三〇 時にアモスの子イザヤ、エゼキアの許に人を遣して云わしめけるは、
 「主、イスラエルの天主は、かく云い給う、〃汝がアツシリア人の王センナケ
 二一 リブに就きて我に願いたることは、我之を聽けり。〃 三二 主が彼に就きて語り給
 える御言は次の如し、11) 〃處女なる娘シオン12) は汝を輕んじ、汝を嘲りたり。
 三三 娘イエルサレムは汝の背後にて頭を振りたり。三三 汝は誰を誇りしや、汝は誰を
 罵りしや。汝は誰に對いて汝の聲をあげ、汝の眼を高處にあげしや。イスラ
 三三 エルの聖なる者に對いてなり。 三三 汝は汝の僕等の手によりて主を誇りて云え
 り。〃 我は衆くのが戦車を率いて山々の高處に、リバノンの頂に上り、その

11) イザヤは答として歌の形で豫言する。
 12) 處女の如くアツシリア人の觸るべからざるイエルサレム。

二四 高き杉の樹と、その擇拔の樅の樹とを伐り倒せり。我はその果にまで
 入れり。しかしてそのカルメルの森をば、^{二四}我伐り倒せり。我は異郷
 二五 の水を飲み、わが足の裏もて圍まれたる水を悉く潤らしたり。¹³⁾ 汝
 は¹⁴⁾わが最初より爲したる所を聞けりや。我は昔日より之を造り、今
 之を成就げたり、戦う者の堅固なる市々は、廢墟の山となるべし。
 二六 その中に住む者は手弱かりき。彼等は戦きて怯惑い、畑の乾草、成
 二七 長せざる内に枯るる屋根の青草の如くになれり。汝の住まいと、汝
 の出入と 汝の道とは、我前より之を知れり、汝の我に對する激怒も
 二八 亦然り。汝は我に對して狂えり、汝の傲慢は上りてわが耳に入れり。
 二九 されば我は汝の鼻に輪を付け、汝の唇の間に轡を嵌めて、¹⁵⁾ 汝の通
 り來りし道より汝を引き戻さん。またエゼキアよ、汝には之を以て
 徴とせん、今年は汝に在り合せたる物を、二年目には自然に生ゆる物
 を食せよ、されど三年目には播きて刈り、また葡萄畑を植りてその果

13) わが軍兵の多いことは、外國の井戸や川の水を悉く飲みほしてしまふほど。—14) 二三、二四兩節はアツシリア王の大言壯語二五節以下は天主のお答え。—15) 第一の象りは猛獸を馴らすこと、第二のは荒馬を制御することから來てゐる。

三〇	を食せよ。16) 三〇 凡てユダの家の遺れるものは、下に根
三一	を張り、上に實を結ぶべし。 三二 蓋し、残れる者はイ
三二	エルサレムより、救わるべき者はシオンの山より出で
三三	來るべし。17) 萬軍の主の熱心之を爲さん。〃 三三 是故に
三三	主はアツシリア人の王に就きて、かく云い給う、〃彼
三三	はこの邑に入らず、之に矢を放たず、楯をもて之を襲
三三	わず、濠を之に繞らさざるべし。 三三 彼はその來りし
三四	道より歸り行きて、この市には入らざるべし〃と、主
三四	は云い給う。 三三 我はこの邑を護りて、わが爲に、
三五	またわが僕ダヴィドの爲に、之を救わん。〃 三三 然る
三五	にその夜の事なりき、主の使來りて、アツシリア人の
三五	陣中にて十八万五千人を撃ち殺せり。18) 彼、夜明に起
三五	き出でたるに、見渡す限り皆死屍なりければ、退き去

16) 一年目はアツシリア軍が侵入したので、耕作ができなかつた。二年目はそれがまだいたので刈入が行われなかつた。三年目は同軍が撤退したので、再び耕作ができるようになった。人間の見る所では、饑饉は免かれそうにもなかつた。それでもまだそうならなかつたのは、前に云われたことを王に信じさせる徴とする思召であつたのである。―賽三七・三〇。―17) イエルサレムは天主の御國の中心である。故に救いはそこから出るといふのである。この救いは、メシアによる天主の御民の救拯の前奏であり前表である。―18) アツシリア軍の陣營はまだロブナの前にあつた。この天使はエジプト人の長子を撃ち、ダヴィドの兵數調査後イスラ

二 すべし、生いくることなからん。』と。1) 彼かれ乃すなわちその
 三 顔かほを壁かべに向むけ、2) 主しゆに祈いのりて云いいけらく、三 主しゆよ、請こ
 四 い願ねがわくは、我われが如何いかに誠せい實じつに、心こころを盡つくして汝なんじの御み前まえ
 五 に歩あゆみ、汝なんじの御み前まえに嘉よみせらるる事ことを爲なしたるかを憶おもい
 六 給たまえ。』と。かくてエゼキア、大おほいに泣なきぬ。3) 然しかる
 七 にイザヤ、未いまだ前まえ庭にわの只ただ中なかを出いでざる間あいだに主しゆの御み言ことば彼かれ
 八 に下くだれり、曰いわく、五 歸かへりてわが民たみの主きみ君きみなるエゼキア
 九 に云いえ、六 汝なんじの父ちちダヴィドの天てん主しゆなる主しゆはかく云い給たま
 十 う、我われは汝なんじの祈いのりを聽きき、汝なんじの涙なみだを視みたり。視みよ、
 十一 我われ汝なんじを癒いせり。三 日かめ目めには汝なんじ主しゆの聖せい殿でんに上のぼるを得えん。
 十二 六 我われ、汝なんじの命めい數すうを十じゅう五ご年ねん増ぞう加かすべし。その上うへアツシリ
 十三 ア人びとの王おうの手てより、汝なんじとこの市まちとを救すくい、わが爲ため及および
 十四 わが僕しもべダヴィドの爲ために、この邑まちを護まもらん。と。』と。』

第二十章 1) 死を告げるのは、病氣

の力を直接天主が抑え給わぬ場合。

一 代下三二・二四。賽三八・一。

2) 王上二一・四にある會てのアカブ

の如く。しかしその精神に至つては

大いに異なる。悲しみゆえと祈るため

に一人になるうとして。一 3) エゼキ

アこの時三十九歳であつた。ヨゼフ

ス・フラヴィウスは、彼にまだ子が

なかつたと云つてゐる。彼が五十五

歳になつた時、その子マナツセが王

位に即いたのであるから、この時は

まだ生まれていなかつた。恐らく上

の子が死んだので、自分は後繼者な

しに死なねばならぬのかと思つて悲

しんだのであるう。

七 次いでイザヤ「無花果の掬塊を一つ持ち來れ。」
 と云いしかば、之を持ち來りてその腫物の上に附
 けしに、彼即ち癒えたり。⁴⁾ 然るにエゼキア、イ
 ザヤに云いけるは、「主我を癒し給いて、我三日
 目に主の聖殿に上らんことは、何を以て徴となす
 べきぞ。」^九 イザヤ之に云いけるは、「主がその曰
 いし所を爲し給わんことは、之を以て徴となすべ
 し。汝は晷が十條進むことを欲むや、もしくは十
 度退くことを欲むや。」^{一〇} エゼキア云いけるは、
 「晷の十條進むは容易し。されば我、かくせらる
 るを欲まず。寧ろその十度後に戻るをこそ欲め。」
 二 茲に於いて預言者イザヤ、主を呼び頼みた
 るに、アカズの日時計⁵⁾に於ける日影をして、そ

⁴⁾ 古代屢々、小アジアではなお、用いら
 れている苦痛緩和劑。但しここでは薬と
 いうよりも、寧ろ約束の奇蹟のしるしで
 ある。⁵⁾ 固定した物の影の長さや位置
 とから日中の時刻を知ることには、大昔か
 ら知られていた。ここに「アカズの日時
 計」と云つてあるのは、多分アカズが造
 つた階段状の台で、王の部屋から見える
 ようになつていたのである。既に日は
 傾き沈もうとしていたので、影は階段を
 匍いのぼり、十段だけを蔽うていた。さ
 て王が奇蹟の徴として、影の十段進むこ
 とを望まなかつたのは、日が沈むにつれ
 て自然にそうなると思つたからである。
 それで彼は影が退いて正午の位置まで戻
 ることを望んだ。それは奇蹟によらずし
 てはできぬことであるからである。影の
 消えることは、別に一日を長くしたり、

の既に過ぎ下りし目盛を、
十度だけ後へ戻し給えり。

二三 その時バラダンの子にし
てバビロニア人の王なるべ
ロダク・バラダン、書簡と
禮物とをエゼキアに送り
蓋し、エゼキアの病める由
を聞きたるなり。二三 エゼ

キア乃ちその到来を喜び、
香料の庫、金銀、種々の薫
物及び香膏、その調度庫、
並びにその寶庫にあらん限
りの物を悉く之に見せた

地球の廻轉を停止もしくは後戻りさせたりすることなく、天主の御旨によつて行われた。エゼキアが影の退くのを見て天主の徴であると認めるや否や、影はまた自然の位置に返つた。この奇蹟は、エゼキアの壽命が終りかけて、天主の御憐憫により回復した時だけに、ますます意味深いものであつた。賽三八・八参照。一日時計のかかる時刻を示すものは、エジプト人の夙に知る所で、オベリスクはそれに用いたのらしい。バビロニア人もやはりそうで、またアカズも多分既にかよるな設備をダマスコで見っていたようである（一六・一〇参照）、イエルサレムにそれを模造した。今でもインドのデルヒには、一年の各季節における影を測つて正確な日中の時刻を定めるのに使う、段のついた巨大な建造物がある。

6) この措置の外部的目的は、エゼキアの病氣回復を祝うためと、また日時計の奇蹟について問い合せるため（代下三二・三一）であつた。しかし他にも秘密な現實的目的が一つあつた。それはエダの王と、共同の敵センナケリブにあたるべく、打合せをすることであつた。―賽三九・一。

一四 一四 然るに預言者イザヤ、エゼキア王の許に來りて之に云いけるは、「この人々は何を云いしぞ。また何處より汝の許に來れるぞ。」エ

一五 一五 イザヤ應えけるは、「彼等は汝の家にて何を見しか。」

一六 一六 茲に於いて

一七 一七 視よ、日來りて

一八 一八 剩え汝より出づ

一九 一九 エゼキア、イザヤに云いけるは、

「汝が語れる主の御言ぞ善き。」⁸⁾ ただわが生くる日の間は、平和と眞實

7) このお告げはエゼキアに辱かしめを受けさせるといふのである。また預言者は更に、偽神禮拜などの罪に對する罰は、バビロニア人の手で行われる旨を告げる。1) 母上三・一八にあるヘリの服従の言と同一。

二〇 とあれかし。」と。り。二〇さてエゼキアの殘餘の事、その武勇の數々、及びその池や水道を作りて市に水を引きし次第は¹⁰⁾是、ユダの王の歴代史の書に録されたるに非ずや。¹¹⁾ 三やがてエゼキアはその父祖と共に眠り、その子マナツセ彼に代りて王となれり。

第二十一章

マナツセの悪行—その後を継ぎし子アモンも悪しくして臣下に殺さる。

一 マナツセは、統治を始めし時、十二歳なりしが、イエルサレムにありて五十五年の間治めたり。その母の名はハフシバと云えり。¹⁾
 二 彼は主がイスラエルの裔等の面前より滅ぼし給える異邦人等の偶像²⁾に従いて、主の御眼前に悪を行えり。³⁾ 三 即ち彼は翻りて、その父エゼキアの崩したる高き處を築き、イスラエル王アカブの爲したる如く、バールの祭壇を設け、並木を造り、天の全衆星を拜み且之を祀りたり。⁴⁾ 四 彼また主の家の中にも祭壇を設けたり、そは主之に

9) 王は國の没落を見ぬことを望む。
 10) 彼は地下を通して水を市に引いた。
 11) 代下三二・三〇。

第二十一章 1) 代下三三・一。—2) 偶像禮拜。—3) これはカナアンの偶像禮拜であつた。4) 代下三三・三。

就きて、「我、イエルサレムにわが名を置かん。」と曰いしものなり⁵⁾。彼また天の全衆星⁶⁾の爲に、主の聖殿の二つの庭に祭壇を設けたり。彼は己が子をして火の中を通らしめ⁷⁾。占トを爲し、吉凶判断を行い、巫子を置き、占卜師を殖し、以て主の御前に悪を行い之を怒らせ奉れり。彼はまた己が作りし並木の神像⁸⁾をも、主の聖殿に安置したり。即ちこの聖殿に就きては、主會てダヴィドとその子サロモンとに曰わく、「我は永くこの聖殿と、わがイスラエル諸族の中より選びたるイエルサレムとに、わが名を置かん。我は最早、イスラエルの足をして、我がその父祖に與えたる地より移らしめじ。但しそは彼等が凡て我の之に命じたる所と、わが僕モイゼの之に命じたる諸々の律法とを守り行ふ場合に然るのみ。」と。九されど彼等は聽かずして、マナツセに唆かされ、主がイスラエルの裔等の面前より絶やし給いし國々の民にも優りて悪を行えり。一〇。主、

5) 母下七・一〇。
 6) 彼はバールやアスダルテ(並木)を拜むほかに、アツシリア人やカルデア人が行つていたような星を拜むことをも始めた。一)モロク禮拜。
 8) アスタルテの像。
 9) 母下七・二六。王上八・一六。九・三。
 10) 不信仰はマナツセの治世に極点に達した。それはユダ族が異教徒なみに墮するに至つたほどであった。

二 その僕なる預言者等の手により語りて曰いけるは、一二ユダ王マナツセは、彼の前にアモル人が爲したる諸々の事にも増りて、是等の憎むべき悪事を行い、その穢れたる所行によりて、ユダにも亦罪を犯さしめられたるは、¹¹⁾ この故に主、イスラエルの天主はかく曰う、〃視よ、我、イスラエルとユダとの上に災厄を下さん。之を聞く者はいずれも、その兩耳共に鳴らん。一三 我はイエルサレムに對してサマリアの測量繩を展べ、¹²⁾ アカブの家の測錘を用い、常に人の蠟板¹³⁾ を拭い消す如く、イエルサレムを拭い去り、之を消して裏返し、なお幾度もその面を鐵筆もて摩擦らん。一四 我はわが相續者の殘餘¹⁴⁾ を棄て、之をその敵の手に付さん。されば彼等はその諸々の敵の荒らし、且掠奪する所となるべし、一五 其は彼等、その父祖のエジプトを出でし日より今日まで、わが前に惡を行い、我を絶えず怒らせたるに由りてなり。〃^{一六} 剩えマナツセは、己が罪によりてユダに罪を犯させ、主の御前に惡を行わしめたる外にも亦、罪な

11) 偶像禮拜。本章二一節參照。一耶一五・四。

12) イエルサレムも、サマリアの如く、荒らされる。一13) 書いてある文字を消すためにかく蠟板を拭うのである。14) 中族は既に捕虜として引き去られていた。

一七 至りぬ。16) 一七 さてマナツセの殘餘の事、即ちその爲したる
 一切とその罪とは、是、ユダの王の歴代史の書に録された
 一八 るに非ずや。17) 一八 やがてマナツセはその父祖と共に眠り、
 己が家の庭園、即ちオザの庭園18) に葬られたり、次いでそ
 一九 の子アモン、彼に代りて王となれり。一九 アモンは統治を始
 めし時、二十二歳なりしが、イエルサレムに於いて二年の
 間治めたり。その母は名をメサレメトと云いて、イエテバ
 二〇 出身のハルスの娘なりき。二〇 彼はその父マナツセの爲した
 二一 る如く、主の御眼前に悪を行えり。二一 即ち彼は、その父の
 歩みし道を全て歩み、その父の仕えし穢らわしきものに仕
 二三 えて、之を拜し、二三 主、その父祖の天主を棄てて主の道を
 歩まざりき。二三 時にその臣僕等、彼に對して陰謀を廻らし、

15) エデア教及びキリスト教の傳承の最古の傳えによれば、彼はイザヤをも鋸びきにさせたといふ。使徒聖パウロは、来一一・三七で暗にこの事を云つてゐる。16) 本二四・四。—17) 代下三三・一一によれば、天主がアツスルパニパル王の諸將を遣してマナツセを攻めさせ給うた時、彼は捕えられてバビロンに引き行かれたが、捕虜たる間痛悔して自由の身となり、イエルサレムに歸るや、敬虔な生活を送り、以て躓きとなつた罪を償おうとした。—18) 前の持主の名に因んでかく稱する。

二四 ついに王をその家にて殺せり。二四然るに國の民は、アモン王に對し謀叛を企てたる者共
 二五 を悉く殺して、その代りにその子ヨシアを己が王となせり。二五さてアモンの爲したる殘
 二六 餘の事は、是、ユダの王の歴代史の書に録されたるに非ずや。二六彼はオザの庭園に於い
 てその墓に葬られたり。次いでその子ヨシア、彼に代りて王となれり。

第二十二章

ヨシア王となり、聖殿を修復す—律法の書を発見し、之に就きて主に問う。

一 ヨシアは統治を始めし時、八歳なりしが、イエルサレムに於いて三十一年の
 間治めたり。その母は名をイデイダと云いて、ベセカト出身のハダヤの娘なり
 二 き。1) 二彼は主の御前に嘉せらるる事を爲し、萬その父ダヴィドの道を歩みて、
 三 右にも左にも逸ることなかりき。三然るにヨシア王の第十八年に、王はメス
 四 ラムの子アシアの子にして、主の聖殿の書記なるサフアンを遣すとして、之に云
 五 えり、^四大司祭ヘルキアの許に行きて、^五金錢の主の聖殿に持參せられたるもの
 即ち聖殿の門衛が民より集めたるものを合計せしめ、^五主の家の監督等を通じ

第二十

二章

1) 代下

三四・

一。

六 て、工人等に與えしめ、聖殿の破損修理²⁾の爲、主の聖殿に
 て働く人々に分たしめよ、^六即ち、是は大工、石工、及び裂
 罅を塞ぐ人々の爲のもの、及び主の聖殿を修復する木材と、
 七 石切場の石材とを買わん爲のものなり。七されど彼等とその
 受くる金錢に就きて決算することなく、之が處理に任せ、之
 八 を信賴して與えよ。」と。八さて大司祭ヘルキア、書記サファ
 ンに云いけるは、「我は主の家にて、律法の書³⁾を見出した
 九 り。」と。かくてヘルキアその書をサファンに與えければ、
 彼之を讀めり。^九次いで書記サファン、王の許に至り、その
 命じたる事に就き報告して云いけるは、「汝の僕等は、主の
 一〇 家^{一〇}にありし金錢を寄せ集め、之を與えて、主の聖殿の工事の
 監督等より工人等に分たしめたり。」と。一〇書記サファン、
 また王に告げて曰く、「司祭ヘルキア、我に一書を與えた

2) この前の修復は約二百五十年前、ヨアスの代に行われた。—3) 多分モイゼの五書全部か、もしくはは申命記だけをさすらしい。代下三四・一四のここに相當するくだりには重要なことが附記してある。「モイゼの手による主の律法の書」。このことから、ヘルキアの発見した書がモイゼ自身の筆に成る手記で、聖櫃に納められていたが、マナツセ及びアモンの不信仰な代に、紛失したか隠されたかしたことが結論として推定される。

一一

り。」と。しかしてサフアン、王の前にてそれを讀みたるに、
二王、主の律法の書の言を聞くや、その衣服を裂き、⁴⁾ 三司祭
ヘルキアと、サフアンの子アヒカムと、ミカの子アコボルと、
書記サフアンと、王の臣僕アサヤとに、命じて云いけるは、

一二

一三「行きてわが爲、民の爲、全ユダの爲、この見出されたる書
卷の言に就きて、主に問え。⁵⁾ 實に主の御震怒は大にして我等
に對し火と燃えたり、其は我等の父祖、この書の言に聽き従い
て我等の爲に録されたる所を悉く行うことを、爲さざりしが

一四

故なり。」と。一四茲に於いて、司祭ヘルキア、アヒカム、アコ
ボル、サフアン、及びアサヤは、アラーイスの子なるテクアの子
衣裳番⁶⁾セルムの妻、女預言者ホルダ⁷⁾がイエルサレムにあり
て第二區に住めるその許⁸⁾に行き、之に語れり。一五時に彼女彼
等に答えけるは、「主、イスラエルの天主はかくぞ曰う、⁹⁾ 汝

一五

4) 若年の王は内容を詳しく知らなかつたから、天罰を下すとの警告を聞いて愕いたが、その前任者達の代に眞の宗教が抑壓されていた後のこととしてそれもなんら不思議ではない。—5) 既に罪夥しくして最早赦されぬか、それともまだ赦される見込みがあるか。—6) 聖殿の⁷⁾ホルダのほかには、デボラとマリアとしか聖書に女預言者として記してない。

一六 等をわが許に遣したる人に云え、一六、主はかくぞ曰う、視よ、我はこの
 處と、その住民とに對し、すべてユダ王の讀みたる律法が云える所の、
 一七 災禍を下さん、一七、其は彼等我を棄てて他の神々に犠牲を獻げ、その種々
 の手作によりて我を怒らせたればなり。故にわが憤怒この處に對し火と
 一八 燃ゆべく、消ゆることあらざるべし。一八、されど汝等を遣して主に問わ
 しめたるユダの王に、汝等かく云うべし、主、イスラエルの天主はかく
 一九 曰う、一〇 汝かの書卷の言を聞き、一九、心に恐れ、主の御前に卑下りて、こ
 の處とその住民とに對する言、即ち彼等が世の驚き呪う所となるべき事
 を聞くや、汝の衣服を裂きてわが前に泣きしにより、我も亦汝の願を聽
 二〇 容れたり、一〇 主は曰う。二〇、この故に、汝の眼のわがこの處に下さんと
 する諸々の災禍を見ることなからん爲に、我は汝を汝の父祖の許に到ら
 しめん、汝は安らかに汝の墓に到るべし、一〇」と。

8) 第二區とは下町のこと。
 9) ヨシアはエジプト軍との戦闘で殞れたけれども、イエルサレムとその聖殿との壊滅、國の荒廢及び掠奪に遭つたこと、ならばに人民が擒となつて引き行かれたことを知らなかつた点では安らかに死んだと云えよう。

第二十三章

ヨシア民一同の前にて律法を讀む—民遵守を誓う—王偶像禮拜を廢し、過越を祝い、エジプト王に殺さる—ヨアカズの治世短く、ヨアキム之に代りて王となる。

一 彼等乃ち彼女の云いし事を王に復命せり。時に彼、人を遣しければ、ユダとイエルサレムとの長老等悉くその許に集い來りぬ。¹⁾ 茲に於いて王は主の聖殿に上れり、またユダの諸々の人々、彼と共にイエルサレムに住めるすべての司祭、預言者等、²⁾ 及び民一同も小より大に至るまで、³⁾ 然せり。さて王は彼等一同の聽ける所にて、主の家に見出されたる契約の書の言を朗讀したり。⁴⁾ 三しかして王、階段の上に立ち、主の御前に契約を結び、以て主に從いて歩み、心を盡し靈を盡してその誠命と律法と典憲とを守り、その書に録されたるこの契約の言を興さんとしたるに、民その契約に同意せり。⁴⁾ 次いで王は大司祭ヘルキア、第二位の司祭等、並に門衛等に命じて、バールの爲、並木の爲、及び天の全衆星の爲に作られたる器具

第二十三章

1) 代下三四・

二八。—2) 律

法を傳え且説

明する人々。

3) 貴きも賤し

きも。—4) 出

二四。書二四

・二五。母上

七・三、四。

五 きたり。の⁶⁾ 彼はまた、ユダの王等がユダの市々と、イエ
ルサレムの周囲にある高き處にて、犠牲を捧げん爲に置
きたる占卜師等を廢し、なおバールや日月、十二星宿、
並びに天の全衆星に對して香を焚きし者をも然せり。

六 彼は更に並木を、⁷⁾ 主の家より、イエルサレム郊外、
セドロンの谷に搬び出さしめ、彼處に於いて之を焼き、

七 灰となして平民の墓の上に撒き散らせり。⁸⁾ 彼はなお主
の家の中にある男娼⁹⁾の家、すなわちまた女等が並木の
爲に天幕の如きものをも織りたりし處を毀てり。¹⁰⁾ 彼は

八 またユダの市々より、司祭を悉く集め、司祭が犠牲を捧
げたる高き處を、ガバーよりベルサベーまで穢し、¹¹⁾ 市

5) この器具焼き棄てのことは、申
七・二五。一一・三に命じてある。
6) ベテルはイエロポアムの時以來
違法祭祀の源泉で中心地であつた
から。―集四九・三。―7) マナツ
セがそこに立てたアスタルテの像
(本二一・七)。―8) この灰は墓に
觸れたので汚れた。おしなべて墓
地はすべての墓同様、不淨とされ
ていた。貴人は自己所有の地所に
墓所を有していた。―9) 王上一四
・二四とその註參照。10) 穢らわし
いアスタルテ崇敬は主の聖殿内に
さえ入りこんでいた。―11) これら
が最早禮拜所として用いられるこ
とのないよう。

九 九の門の左手にある、市長ヨブエの門の入口の、門の祭壇を毀てり。然れども高き處の司祭等は、イエルサレムにある主の祭壇に上らずして、ただその兄弟の中にて酔なき麪を食せるのみ。¹²⁾ 彼はまたエンノムの子の谷にあるトフェト¹³⁾をも穢したり、これ何人もその子もしくはその娘を火によりてモロクに捧ぐることなからんためなり。二彼は更にファルリム¹⁴⁾にある宮人ナタンメレクの部屋に近く、主の聖殿の入口にて、ユダの王等が陽に献げし馬を取り除けり、また日の車を火もて焼きぬ。三またユダの王等が作りし、アカズの高間の屋根の上にある祭壇、及びマナッセが主の聖殿の二つの庭に作りし祭壇をも、王は毀ち、彼處より馳せ行きて、その灰をセドロ川に撒き散らせり。四またイエルサレムに於いて

一三 蹉跌山¹⁵⁾の右方にある高き處は、イスラエル王サロモンが、

12) 王は彼等を悲惨な状態に棄ておくことを欲せず、聖なる供物で命をつなぐことをこれに許した。しかし彼らはレヴィ人中の律法上不淨な人々(利二一・二一—二三)の如く扱われた。

13) ベン・ヒンノムの谷にある、モロクに小兒等を人身御供に献げた所。—14) ノアルリムすなわち場所とは、聖殿に近く、しかも聖殿の外の前庭の西側にある、厩舎であつた。—15) 橄欖山の南峯。今日まで「つまずき山」即ち人に罪を犯させた所という名がある。

一四 シドン人の偶像アスタロトと、モアブの蹉跌カモスと、アンモンの裔等の厭うべき者メルコムとの爲に築きしものなるが、王は之をも穢せり。16) 一四 なお彼は

一五 諸々の像を碎き、並木を伐り倒し、その處を死人の骨もて充たしぬ。17) 一五 剩え

ベテルにある祭壇と、ナバトの子にしてイスラエルに罪を犯さしめたるイエロ

ボアムが作りし高き處と、この祭壇及び高き處をも、彼は毀ち、焼きて粉とな

一六 し、また並木をも焼けり。18) 一六 さてヨシア、振り向くや、其處の山に墓あるが

見えしかば、人を遣してその墓より骨を取り出し、之を祭壇の上にて焼き、そ

れを穢せり。是、天主の人が告げたる主の御言のままにして、即ち彼は是等の

一七 事を豫言したるなり。一七 時に、彼、「わが見るかの碑は何ぞ。」と云いしに、そ

の邑の人々之に答えて曰く、「そは、ユダより來りて、汝がベテルの祭壇の上

にて爲したる是等の事を豫言せる天主の人の墓なり。」と。19) 一八 彼乃ち云いける

は、「之を措け、誰もその骨に觸るるなかれ。」と。かくてその骨は、サマリア

一八 より來りし預言者の骨と共に、その儘手を觸れずして置かれたり。一九 更にイス

16) 王上

一一・

七。

17) 穢れ

はおも

にこれ

によつ

て生じ

た。

18) 王上

一三・

三二。

19) 王上

一三・

二。

二〇 ラエルの王等が作りて主を怒らせ奉りし、サマリアの市々にある高き處の宮もヨシアは悉く之を取り除き、凡てベテルにて爲したる如く、之に爲せり。二〇彼また其處にある高き處の司祭等を悉く祭壇の傍にて殺し、²⁰⁾ 人の骨をその上にて焼きぬ。しかしてイエルサレムに歸るや、^{二一} 彼萬民に命じて云いけるは、「主汝等の天主の爲に、この契約の書に録されたる所に循いて、過越を行え。」と。²¹⁾

二三 蓋し、イスラエルを審きし士師の時より以來、イスラエルの王等とユダの王等とのいづれの代にも、かくの如き過越の行われしことはあらず、^{二二} ただヨシア王の第十八年に、イエルサレムにて主の爲にこの過越行われしのみ。^{二四} 更にまたヨシアは、巫子や占卜師や神々の像、並びに穢らわしきものや憎むべきものの、ユダ及びイスラエルの地にありしを、取り除きたるが、是は司祭ヘルキアが主の聖殿にて見出したる書に録されし律法の言を興さんが爲なりき。

二五 モイゼの律法に全く循い、その心を盡し、靈を盡し、力を盡して主に立歸りし、彼の如き王は彼の前にあらず、また彼の如き者は彼の後にも出でざりき。

20) 律法 規定の 死刑。
 21) 代下 三五・ 一。出 一二・ 二。

二六 然れども主は、マナッセが氣障りなる事を以て之を激せしめ奉りしに由り、ユダに對して御怒りを燃やし給える、その大いなる御憤怒を撤回し給わざりき。²²⁾ 主乃ち曰い

二七 けるは、「我はユダをも亦、曾て我がイスラエルを取り去りたる如く、わが面前より取り除き、わが選びたるこのイ

二八 エルサレムの市と、其處にわが名あるべし。」と云いし家とをうち棄てん。」²³⁾ 二八 さてヨシアの殘餘の事、及び

二九 その爲したる一切は、是、ユダの王の歴代史の書に録されたるに非ずや。²⁴⁾ 彼の代に、エジプトの王ファラオ・ネカ

三〇 オ、²⁴⁾ アッシリア人の王を攻めんとて²⁵⁾ 上り來り、エウフラト河に至りしかば、ヨシア王之と會戦せんとて行き、²⁶⁾

三〇 彼と見ゆるに及び、マゲッドにて殺されたり。²⁷⁾ 三〇 その臣僕等死せる彼を搬びてマゲッドよりエルサレムに持ち來

22) ヨシアの死後に見られたよう
な、人民の實際の改心は起らな
かつた。それ故豫め警告されて
いた天罰が下らざるを得なかつ
た。 23) 本二四・二。 24) ネカ
オは第二十六(サイト)王朝の
出で、始めてナイル河と紅海と
を運河でつなごうと試みた人。
25) ナブエドノソルの父、ナボパ
ラツサルを攻めようと。 26) エ
ジプト王は表面はただ妨害せず
通してくれと頼んだけれども、
(代下三五・二一)、ヨシアは、
誰かがシリアに首尾よく地歩を
占めたら、ユダの獨立も水の泡
となることを知っていた。
27) 代下三五・二〇。

三二 之をその墓に葬れり。次いで民、ヨシヤの子ヨアカズを奉じて之に注油し

三三 三歳なりしが、イエルサレムにありて三箇月の間治めたり。その母は名をアミ

三四 タルと云い、ロブナ出身のイエレミアの娘なりき。28) 彼は萬その父祖の爲し

三五 たる如く、主の御前に悪を爲せり。三三よりてファラオ・ネカオは彼をエマトの

三六 地にあるレブラに繋ぎ、そのイエルサレムにて治むることなからしめ、また、

三六 罰金銀百タレント、及び金一タレントを國に課したり。三四かくてファラオ・ネ

三六 カオはヨシヤの子エリアキムを、その父ヨシヤの代りに王となし、その名をヨ

アキムと改めたり。29) しかしてヨアカズを執りてエジプトに曳き行きぬ。ヨア

カズは其處にて死せり。三五さてヨアカムは國中の各人に割り當ててファラオの

命のままに醸金せしめ、その銀と金とをファラオに與えたり、即ち國民より各

々その能力に應じ金銀を取り立てて、ファラオ・ネカオに與えしなり。三六ヨア

キムは、統治を始めし時二十五歳なりしが、イエルサレムに於いて十一年の間

28) 代下
三六・
二。

29) 改名
は獨立
を奪わ
れたし
るし。

治めたり。その母は名をゼビダと云いて、ルマ出身のフアダヤの娘なりき。三七 彼は萬その父祖の爲したる如く、主の御前に悪を爲せり。

第二十四章

ヨアキム—ヨアヒンの治世—ユデア人バビロンに捕え移さる—セデキアの治世。

一 彼の治世に當りて、バビロンの王ナブコドノソル¹⁾ 上り來り、ヨアキム之に三年の間臣事するに至りしが、後また之に叛きたり。ニ時に主はカルデア人の掠奪者²⁾ シリアの掠奪者、モアブの掠奪者、及びアンモンの裔等の掠奪者等を遣して彼に寇せしめ、また彼等を遣してユダに寇せしめ、以て之を滅ぼさんとし給いぬ。即ち主がその僕なる預言者等によりて曰いし御言の如し。三 さて斯くなりしは、主のユダに對する御言によるものにして、之をその御前より除き給わんが爲なり、そはマナツセの犯したるすべての罪に由り、四 彼が罪

第二十四章 1) ナブコドノ

ソルはまたネブカドネザルとも云い、バビロン・カルデア王朝の始祖ナボパラツサルの子で、ヨアキムの第三年にネカオを撃破し、またヨアキムをして納貢させた。但一・一参照。二) 到る所で追剥、掠奪を働く人々の團體や仲間。三・二七。

五 なき血を流し、罪なき者の血汐もてイエルサレムを充滿したるに由るなり。この故に主は宥恕さんとはし給わざりき。⁴⁾
 五 さてヨアキムの殘餘の事、及びその爲したる一切は、是、
 ユダの王の歴代史の書に録されたるに非ずや。やがてヨアキムは、その父祖と共に眠りぬ。⁵⁾ ⁶⁾ 次いでその子ヨアヒン、彼に代りて王となれり。⁷⁾ エジプトの王は最早累ねてその國より出で來ることなかりき。蓋はバビロンの王、エジプトの河よりエウフラト河に至るまで、エジプト王の有てる所を悉く取りたればなり。⁸⁾ ⁹⁾ ヨアヒンは統治を始めし時、十八歳なりしが、イエルサレムに於いて三箇月の間治めたり。その母は名をノヘスタと云いて、イエルサレム出身のエルナタンの娘なり。⁹⁾ 彼は萬その父の爲したる如く、主の御前に惡を爲せり。¹⁰⁾ その頃⁸⁾ バビロンの王ナブコドノソルの臣僕等¹⁾

⁴⁾ 罪の量は天主が御正義により罰を下し給わざるを得ぬほど、またたとい代願をモイゼやサムエルがしたとしても、それに御意を留め給うことが出來ぬほど、夥しいものであつた。―本二一・一六。―⁵⁾ 彼は戰場で殞れた。父祖と共に眠るとは、ただ「死ぬ」というだけの意味。―⁶⁾ かくの如くユデア人はバビロン人の手中に落ちて、生かすも殺すもその意の儘となつた。
⁷⁾ 耶二二・二四。―⁸⁾ 代下三六・一〇。春に。―⁹⁾ 最初はナブコドノソルの諸將

二 イエルサレムに上り來り、堅壘ある邑々圍まれたり。10) 二またバビロンの王ナブゴドノソルもその臣僕等を率いて市に來り、之を攻略らんとせり。

二三 茲に於いてユダの王ヨアヒン、その母、その臣僕、その將、及びその宮

人と共に、バビロン王の許に出で降りしかば、バビロン王之を捕えたり、

二三 彼の治世の第八年のことなり。二三 しかして彼は其處より主の家の寶と王の

家の寶とを悉く持ち去り、且イスラエル王サロモンが主の御言に従いて、

一四 主の聖殿に造りおきし諸々の黄金の器具を打ち碎けり。11) 一四 彼はまたイエ

ルサレムのすべての人々、及びすべての長等、軍のすべての勇士一萬人、

ならびに工匠と鍛冶とを、捕虜として移せり。されば國の貧しき民の外に

一五 は、遺れる者あらざりき。一五 彼はまたヨアヒン、及び王の母と王の妻等、

ならびにその宮人をもバビロンに移せり。なお國の裁判官等を捕虜として

一六 イエルサレムよりバビロンに曳き行き、12) 一六 更にすべての力ある人七千人、

工匠と鍛冶一千人、及びすべての勇士軍人、彼等をもバビロンの王は捕虜

工匠と鍛冶一千人、及びすべての勇士軍人、彼等をもバビロンの王は捕虜

がイエルサレ

ムに攻め上つ

たが、後には

王自ら(一一

節)、ヨアキ

ムの離反(一

節)を懲らす

べく出征した

10) 但一・一。

11) 賽三九・六。

12) 代下三六・

一〇。帖二・

六。一一・四。

一七 としてバビロンに曳き行けり。¹³⁾ 一七しかして

彼ヨアヒンの代りにその叔父マツタニアを立

一八 て之にセデキアと名乗らしめたり。¹⁴⁾ 一八セデ

キアは、統治を始めし時二十一歳なりしが、

イエルサレムに於いて十一年の間治めたり。

その母は名をアミタルと云いて、ロブナ出身

一九 のイエレミアの娘なりき。^{一五)} 彼は萬ヨアキム

の爲したる如く、主の御前に悪を爲せり。

二〇 實に主はイエルサレムに對し、ユダに對し

彼等をその御面前より取り棄て給うまで、怒

り給いしなり。やがてセデキア、バビロンの

王より離れ去りぬ。¹⁵⁾

¹³⁾彼は金力勢力により謀叛を企てそるな者は悉く曳いて行つた。それですべての士師等

(十五節)―その中には司祭や預言者達もいたが(結一・三の如く)―すべての富者、建

築専門家、兵学者等をバビロンの國に連れて行つたのである。ユデア人が捕虜として曳か

れたのは、一度にではなかつた。このいわゆるバビロンの捕囚は、キリスト降生前六〇五

年乃至五三八年の約七十年間に行われた。―耶二四・一。結一七・一二。―¹⁴⁾本二三・三

四参照。―¹⁵⁾この反逆故に、彼はまたエゼキエルにも(結一七・一三以下)厳しく詰責される。

第二十五章

ナブコドノソル、イエルサレムを圍みて之を取り、セデキアを捕らう—
イエルサレム市と聖殿破壊さる—總督として留められしゴドリヤ
殺さる—エヴイルメロダク、ヨアヒンを釋放す。

一 一 さてセデキア在位の第九年第十月に至り、その月の十日のことなりき、バ

二 ビロンの王ナブコドノソルとその全軍、イエルサレムに攻め來り、¹⁾ 之を

三 圍みてその周圍に壘を築けり。²⁾ かく同市は封鎖せられ包圍せられしまま

四 セデキア王の第十一年を迎えしが、³⁾ 市の食糧

五 不足甚だしく、その地の民にパン一つだもあらずなりぬ。⁴⁾ しかして市は

六 突破られしかば、軍人皆夜に、王の庭園に至る、二重の石垣の間にある門

七 の道より逃げ去れり（折しもカルデア人、市の周圍に見張り居たり）。か

八 くてセデキアは荒野の平地に至る道より落ちのびたり。⁵⁾ 時にカルデア人

九 の軍勢、王を追いかけ、イエリコの平野にて之に追いつきしが、彼と共に

第二十五章

1) 三度目の來
攻。— 2) 耶三

九・一。五二

・四。— 3) 同

市は甚だ防備

堅固であつた

ので、攻圍は

一年五箇月と
二十七日に亘
つた。

六 ありし戦士、皆逃げ散りて、彼を遺棄にせり。六茲に於いて彼等王を捕え、レブラタに曳き行きてバビロン王の許に至りしに、彼、之に判決を云い渡せり。七 次いで彼、セデキアの子等をその前に於いて殺し、彼の眼を抉りぬき、⁴⁾ 鎖もて之を縛め、バビロンに曳き行けり。八 バビロン王の第十九年のことなりしが、五月に至り、その月の十一日に、バビロン王の臣、軍將ナブザルダン、イエルサレムに來りて、九 主の家と王の家ならびにイエルサレムの家々を焼き、あらゆる家を火もて焼けり。⁵⁾ 一〇 また軍將と共にありしカルデア人の全軍は、イエルサレムの周囲の石垣を崩せり。二 かくて軍將ナブザルダンは、なお市中に残れる民と、バビロン王に投降せる脱走兵と、平民の殘餘とを移しけるが、三 ただその地の貧民の中より葡萄栽培者と農夫とを殘したり。三 三 カルデア人はまた、主の聖殿にありし青銅の柱と、臺と、主の家にありし青銅の海とを打ち碎きて、その青銅を悉くバビロンに搬べり。⁶⁾ 一四 なお彼等は青銅の釜、柄杓、肉叉、爵、乳鉢、及び勤

4) バビロニア人が屢々行つた殘虐行爲で記念碑などにも描かれていゝる。— 5) イエルサレムのこの壊滅は、キリスト降生前五八八年のことであつた。
— 詩七三・七。
6) 耶二七・一
九。

一五 行に用うるあらゆる青銅の器具を取れり。一五 更に軍將は、金、銀もて作られたる香爐や鉢をも取り、一六 サロモンが主の聖殿の爲に作りし、二本の柱一つの海、及び臺をも然せり。諸々の器具の青銅の重さは、量るべからざるほどなりき。一七 一本の柱は高さ十八クビトにして、その上にある青銅の柱頭は高さ二クビトなり。また柱頭の上にある網細工と石榴とはすべて青銅製なり。第二の柱にも亦同様なる裝飾ありき。一八 軍將また首席司祭サラヤ、次席司祭ソフォニア、及び三人の門衛を捕え、一九 なお、兵士等を統率する一人の宮人と、王の前に侍立する者の中市にて見つけし五人と、その地の民の新兵を訓練する軍長ソフェルと、平民の中市にて見當りし六十人とを、市より捕え行けり。二〇 軍將ナブザルダンは是等の者を捕えて、レブラタにあるバビロン王の許に曳き行きたり。二一 バビロン王乃ちエマトの地にあるレブラタに於いて、彼等を撃ち殺しぬ。8) かくユダはその地より移されたり。二三 されどバビロン王ナブゴドノソルは、民のユダの地に残れる

7) 王上七・一
 五。代下三・一五。耶五二・二一。
 8) これはレブラタで處刑された人々の中セデキアの叛乱に特別加擔した有力者たちをさしている。

二三 者、即ち己が残りおきし者の爲に、サファンの子なるアヒカムの子ゴ
 ドリアを總督とせり。三三 然るに軍の諸將、及び之と共にある人々、こ
 の事、即ちバビロン王がゴドリアを立てし由を聞くや、ナタニアの子
 イスマエル、カレの子ヨハナン、ネットファト人タネフメトの子サラ
 ヤ、マーカテイの子イエゾニア、及びその部下の人々、マスファ⁹⁾に
 二四 あるゴドリアの許に來れり。三四 時にゴドリア、彼等及びその部下に誓
 いて云いけるは、「カルデア人に仕うることを恐るるなかれ。この地
 に留まりて、バビロン王に仕えよ。さらば汝等に幸福あらん。」と。
 二五 然るに第七月の事なりき、王の後胤エリサマの子なるナタニアの子
 イスマエル、十人の者を伴い來りてゴドリア¹⁰⁾を討ちしかば、乃ち死
 せり。彼また之と共にマスファにありしユデア人とカルデア人とをも
 二六 討てり。二六 茲に於いて、小より大に至るすべての民、及び軍の諸將、
 二七 カルデア人を恐れ、起ちてエジプトに至りぬ。二七 然るにユダの王ヨア

9) マスファは今日
 のテル・エンナス
 べで、シケムにゆ
 く街道に臨み、イ
 エルサレムから北
 へ行程約二時間の
 所にある。――10) ゴ
 ドリアはユデア人
 で(二二・一二を
 見よ、同族の人
 々に、艱難を忍受
 してバビロン王に
 服従すべきことを
 すすめた。それで
 イエルサレムの西
 北にあるマスファ
 で殺されたのであ
 る。

ヒンが移うつされてより三十七年ねんめ目のことなりしが、第だい
 十二月がつに至いたり、その月つきの二十七日にちに、バビロン王おうエ
 ヴイルメロダク、¹¹⁾ 其の統治とうちを始はじめし年としに、ユダ王おう
 ヨアヒンの頭こうべを擡もたげしめ、之これを牢獄ひとやより出いだせり。¹²⁾
 二八 二八しかして之これに懇篤ねんごろなる言ことばをかけ、その位くらゐを之これと共とも
 二九 二九にバビロンにある諸王しよおうの位くらゐの上うへに置おけり。二九 彼かれまた
 その獄中ごくちゆうにて着つけおりし衣服ころもを着換きかえしめたり。そ
 れよりヨアヒンはその生いくる日ひの限かぎり、恒つねに彼かれの前まえ
 三〇 三〇にてパンを食しょくせり。三〇 彼かれまた之これが爲ために扶持ふちを定さだめて
 之これを斷たざりしが、そは毎日まいにち王おうより彼かれに與あたえられ、
 その生涯しやうがいの日々ひびに亘わたりて然しかりき。

11) エヴィルメロダクはナブゴドノソル
 の王子で、且後繼者であつた。——12) バ
 ビロニアの王が、退位させられたヨア
 ヒンになぜかかる敬意を表したか、そ
 の理由は不明であるが、察するに己が
 即位の際の大赦の如きものではなかつ
 たらうか。とにかく天主は、王位にあ
 るダヴィド最後の子孫を全く捨てるこ
 とを、お望みではなかつた。同時にこ
 の事を、もし選民が捕虜の身となつた
 のを天罰と認め、心から主に立ち帰る
 ならば、主もその流謫をいつか終らせ
 給うであるうという、慰めに満ちたし
 るしとし給う思召であつた。